
Dark rose～永遠の時間～

旭日葉乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a r k r o s e 　永遠の時間

【Nコード】

N 2 1 8 3 J

【作者名】

旭日葉乃

【あらすじ】

小さい頃から友達に”薔薇の香りがするね”といわれてきた沙羅。それは、自分が薔薇姫であるせいだった。吸血鬼、人間をも魅了してしまう薔薇姫の見目麗しさ。それは、けっして解かれない呪縛の印し。その血の運命から逃れる事は出来ない――。永遠の時を樹と過ごすか、限りある人生を明冬と共に生きるか――。沙羅はどちらの手を取るのか……すべて答えはこの中に。

第1章（前書き）

加筆修正が所々入っているので読みにくいかと思います。

ご了承下さい。

第1章

真紅にもちかい、赤色の薔薇。それは甘く香り立つ誘惑の華。誰もがその華に魅了される。心を薔薇に魅せられ、動くことも出来なくなる。

指一本、触れさせない。まるで自分を守るかのように棘とげがある。

その棘があったとしても美しく香りを放つ。けれど、どこか儚い華。

その華の別名は『吸血鬼ヴァンパイアの華』

吸血鬼が最も好み、喉から手が出るほど欲しがる花、人間の少女。それは媚薬と言っても変わりはない。そしてその存在は、彼らを一層引き立て、狂い惑わす。美しく危険な薔薇姫。

二千年に一度——生まれてくるか、こないか。そして、彼らが待ち焦がれてやっと、その薔薇姫は生まれた。可愛らしい産声うぶごえを上げ、生まれてきた。薔薇の血と香りを持った赤子。それを持ったものは抗えぬ運命を抱え、何も知らされず大切に、愛され育った——。

誰も居ない教室に一人の少女が窓の外を眺めていた。

透き通るような真っ白い肌。ふっくらとした桃色の唇。艶やかな長い髪……。何処へ言ってもごく自然に目を引く容姿。

少女は教室に掛かっている時計を見る。時計はちょうど、午後6時を指している。少女は机の横に掛けられていたカバンを持ち、教室を出た。

人一人いない廊下。響く足音は先程、教室を出た少女のもの。昼は笑い声、教師の怒鳴り声が飛ぶ学びやだが、夕方になるとそれは乏しく聞こえてはこない。しかし、少女は慣れているのか、恐がる素振りもみせず、歩いて行く。

この少女の名前は水無月沙羅みなづきさら。

玄関を降り、私は靴を履き替えようと手を伸ばした。そのとき、男女の争っている声が聞こえてきた。私は驚き、手を引っ込める。そして声のする方へ、そろりそろりと足を運ぶ。

「どうして…？　なんでっ…？」

グスグスと鼻を吸る音が聞こえる。どうやら、女の子が泣いているようだ。覗いてみると、女の子が両手で顔を覆い泣いている。遠くからでも分かる泣きはらした目。

嫌な場面に遭遇したものだ、私は心の内で悪態を付く。

「どうしてっ！　あたしの何が悪いの」

別れ話か。早く終わらないかな…私、早く帰りたいんだけど。

「別に？　理由は無いよ？　ただ、君に飽きただけ」

その言葉を聞いて、おもわず上げそうになった声を飲み込む。よく、そんな事面と面に向かって言える。平気でそんな事言えるなんて…。まあ、私も人の事いえないけど。

私がつま息を出すのと同時に女の子の悲痛な声が響いた。

「あたしはっ…：…こんなに貴方の事がっ…：好きなのにつ！」

「――はあ。結局、それかあ。だから飽きるんだよね…：女の子って。君は違うと思うってなのになあ、他の子達と…。がっかりだよ。もう目障りだから消えて良いよ？　ああ、それから、もう俺の前に現れないでね？」

男は詫びる様子もなく淡々と女の子に告げる。

私はその雰囲気にならず、玄関を去ろうとしたのだが…。

♪♪♪♪♪　♪♪…と携帯のメロディーが鳴った。

「――誰？」

男は私の携帯の音に反応し、声を掛ける。そして、男は私の方へと近づいて来た。

こっちに来る！　どうしよう…！　わたわたししていると玄関の隅に私が隠れられるほどの場所があり、そこに身を隠す。

「此処に誰か、いたんだと思ったんだけど…：…気のせいかな」

男は不思議そうに言いながら、私のいた場所をまじまじと見つめ、

気が済んだのか背を向け歩き出した。少しずつ、足音が遠ざかって行く。

男が行ってしまったのを確認し私は全力で玄関を出た。その姿をあの男に見られていたとも知らずに。

沙羅の長い髪が夕日に染まり、橙色に輝いている。その、後姿うしろすがたを見て男は言った。

「……ついに見つけた、薔薇姫」

口角を上げ、男は不敵に微笑んでいた。

第2章

「：携帯マナーモードにしとけばよかった」

そんなことをぶつぶつ呟いていると、いつの間にか家に着いていた。家に入って靴を脱ぎ、中に入る。入って直ぐ、私は自分の部屋へ直行した。

部屋の扉を開くとなんら代わりの無い、いつもの風景が目飛び込んでくる。持っていた鞆かばんを机の上に置き、私はベッドへと倒れ込んだ。

今日はいろいろな事が在ったなあ……。あれこれと考えていると、次第に瞼が重くなってきた。疲れたし、もう眠ろうと瞳を閉じた瞬間。

電話の音が鳴り響いた。リビングにある電話だ。その音で私は飛び起きた。

「……電話？ お母さん、いないのかな？」

ふと思った疑問に首を振ってそれを否定する。『今日遅くなるから』と言ったお母さんの言葉を思い出した。そうだ。忘れていた……。今日、誰も居ないんだった。家に居るのは私一人。

電話は尚も鳴り続けている。出るしかないか。めんどくさいなあと思いながらも、しぶしぶ私はリビングへと向かった。

まだ音を鳴り響かせている電話の受話器をとり、相手に話し掛ける。

「もしもし……水無月ですが」

「……………」

「どちらさまでしょうか？」

「……………」

電話の相手はずっと無言のまま、しかも何も喋らない。不思議に思い再度、訊ねる。

「あの：どちらさまでしょうか？」

私がそう問うと、いきなりブツツといって電話が切れた。

「え、ちょっ…」

自分の体から血の気が引くのを感じる。いたずら電話？ 首を傾げ受話器を戻すと、何か背中に違和感を覚えた。違和感と言うよりも、何かの気配。後ろに人が立っているようなそんな感覚。感覚に近いような威圧感。背中に集中する相手の視線。私は恐る恐る、ブリキの人形のように首を動かし見た。ゾクリと肌が粟立った。後ろじゃない窓から見てるんだ。勢いよく振り返るとそこに視線の主はいなく、外の木だけが何かの存在を示すように大きく揺れ動いていた。

ほっと一息し、私は窓の鍵をはずす。がらがらと音を立て窓は開く。外を見ても、誰もいない。猫の影だっで見当たらない。一体なんだったというのか。しかし、何かが私を見つめていたのは事実。ブルリと体を震わせ、窓を閉める。辺りが暗くなっている事に気がつき、カーテンも閉める。カーテンを閉めたところで、ドタドタと騒がしい足音がした。この足音は柚鶴だろう。

「ただいまー！ あ、お姉ちゃん、帰ってたんだ」

「うん。お帰り柚鶴」

私はそう言ってリビングの中央のソファに座る。

「お母さんってまだ帰ってきてないの？」

そう言って、柚鶴はランドセルから教科書を出す。

「なんで、こんな所で開けるのっ？ お母さんに怒られるでしょ」
じろりと柚鶴を見やる。

「いいじゃん、別に。あ、それよりさー。姉ちゃんに手紙って男の人が、これ渡してきたよ」

白いよれよれの封筒を、ズボンのポケットから出し見せてくる。

「ぐしやぐしやになっちゃったね、ごめん」

「誰からもらったの？ これ…」

「さあーね、顔フードで隠れてわかんなかったけど。——封筒のところに書いてない？」

封筒の後ろを見てみると、何も書いていない。唯一書いてあるのは私の名前だけ。

「なあーんにも、しろぺっぺのまんま」

ぴりぴりと封筒を開けると、四つ折にされた紙が一枚入っていた。それを取り出し、開く。

「な、なにこれ…」

そこには、こう綴られていた。

《やっと、会えた》

私は短く悲鳴を上げ、紙を手から離す。

「ゆ、柚鶴…！ あ、れ見て」

弟に床に落ちた紙を指すと、柚鶴は身を屈め紙を手取る。

「気持ち悪っ！ なんだよ、これ」

白い顔をしながら柚鶴は私を見る。

「私も、わからない…：…いたい、なんなの？」

「お母さん達が来るまで、待ってよう」

「う、うん…」

不安を抱きながら、二人で身を寄せ合って両親を待った。

第3章

ため息を一つ吐き出し家をでると、明冬^{あきと}が待っていた。

「おっす。昨日、聞いたけどさ…本当に悲惨だよな、沙羅」

「…言わないで。私も怖いんだから」

「まあ、な。あんな手紙来たら誰だってな」

「…行こう。もう、その話はおしまいっ！」

明冬の腕を掴み、歩き出す。嫌な事は忘れるのが一番いい。

手を引っ張る沙羅を一瞥し、ふと考える。昔から沙羅は嫌な話があると思う違う話題に切り替えるくせがあった。例えば怪談話等。まだ直っていないのかと思うと、おもわず笑みが零れた。

私が急かした所為もあって、二人はいつもより早く学校に着いた。

「おーいつもより早っ！ 沙羅のおかげだな」

頭をくしゃりと撫でてやると、顔を真っ赤にして怒鳴られた。怒るのをわかっていてそれを明冬はやる。

「…子供じゃないし」

「まだ、子供だろ。沙羅は」

「明冬は？ 私と同じなら明冬だって子供でしょ」

一枚上手の私に言われ、ぐっと押し黙る。黙った明冬を見て、笑いかみ殺す。

ドアを開くと親友の蒼渥^{あおり}が私に抱きついてきた。

「おはよ〜んっ…沙羅！」

「おはよ。あんたは、朝から元気だね」

私が呆れて言うのと、蒼渥は柔らかい笑みを浮かべて首を縦に振る。

「あったりまえだよ〜。だって、朝から…あの久遠^{くおん}くん^{くん}に会ったんだよ!？」

「はいはい、またクオンクン？」

久遠くんって、くとの字が多い。

「そうそう!」

元気よく首を振る蒼渥に首が折れないのかと、少し心配になる。

久遠というのは学校で有名な男子。なんでも女子の人気を取るの是一位、二位だとか。

「成績優秀、運動神経抜群、女子の憧れってか? 完璧君だもんな。世の中にそういう奴がいるなんてな」くわーっと欠伸をして机に伏せる明冬。

「ね、沙羅。取り巻きの話聞いた?」

「あ、知ってる。怪我させた子が居るとかで:なんか凄い事になったってやつ?」

「そうそう。沙羅も気をつけなよ?」

何故、そんなことを私にいうのか。

「なんで? 私、その人と喋ったことも無いのに」

記憶を探ってみても、そんな喧嘩をふっかけられるようなことはない。

「沙羅を:その取り巻きがいがんでるって。聞いたの」

「なんかの間違いでしょ、それ」

顔を真っ赤にし否定する。

「なんかね。久遠くんの口から水無月って出て、その事:取り巻きの一人が聞いたらしくって:ほら、水無月って苗字、此処に沙羅しかないでしょ? だから」

蒼渥の言わんとした事がわかり、続ける。

「だから、私を目の敵したって訳?」

「うん、そう」

だったら昨日の手紙も取り巻きが? 不気味な嫌がらせをするもんだ。はあとため息を吐き、幸せそうに寝ている明冬を見る。

「いいよね:明冬は。なんにも知らないで」

呑気にいびきをかかいている明冬に、沙羅はまた息を吐き出した。

蒼渥、私、明冬で屋上に昼食を食べに来ていた。

「はぁーっ！ 気持ち良い。やっぱり昼飯は此処で食うのが一番だな」
パンをほお張りながら、喋る明冬。

「きつたないって、ぁーもうっ！ こぼすなバカ」

箸にウインナーを突き刺しながら注意する蒼渥。そんな注意もどうかと思う。

「あははっ…」

空を仰げば、爽快の天気。明冬がそう言うのもわかる。

二人の格闘を見ながら、せっせとご飯を口に詰め込む。パクパクとお弁当箱を空にしていく。綺麗に食べ終わったそれを包んであったものに包み、最後にお茶を飲む。なんか婆くさいけど。

「いい天気。眠たくなる…」

昼の陽があたり、目を閉じようとする私に蒼渥は声を掛ける。

「沙羅ぁー。行くよ」

頭上から声が聞こえ、顔を上げた。すぐ横においてあった弁当箱を持ち、行ってしまう二人を慌てて追う。

「ま、待ってー！」

追いつき、蒼渥の制服を掴む。

「相変わらず、とろいな。沙羅」

明冬を睨み頬を膨らます。

「眠たかったんだもん、しょうがないでしょ。…次なんだっけ？
数学とかだったらやだなー」

「現国。だーりいな、おれ、サボろーかな」

「単位取れなくなっても良いなら、そうすれば？」

「…たまに蒼渥って怖い事いうよな」

カツカツと階段を降りる3人の足音が響く。降りる音と重なるように誰かの足を音が上ってくる。先生ではないだろう。現に制服を着ている。男子だ。

「ふぁーあ」

その男子が欠伸をする。人が居るのに気にもせず、大きな欠伸。すれ違った時に少し笑ってしまった。気付いているだろうか。ちよつと不安になる。その男子は屋上の扉の向こうへと消えてしまい、表情はわからなかった。

「沙羅？　どうしたの？」

「ううん、なんでもないっ」

そう言って後ろを気にしながら、友人の元へと歩き出した。

第4章（前書き）

加筆修正完了

第4章

校舎の壁に掛かっている時計を見て、沙羅は明冬と蒼渥に「また明日ね」と言って教室を出た。下駄箱から靴を取り出し、学校を出る。学校を出て空を見上げると、もう夕陽が沈みかかっていた。

私の頬を撫でるように風が通り抜ける。

時刻は午後、7時。遅くまで喋っていた所為か、辺りは薄暗く、電灯がポツポツと点きはじめていた。

「ちよっと、喋りすぎたかな…」

暗くなっていく空を見る。

手紙が来てからというものは挙動不審になりつつあった。誰か付けているんじゃないかとか、マイナス思考にどうしてもなってしまう。しかし、7時を過ぎても、私が通っている学校の生徒が疎らに歩いていて。ほっとする。安堵しながら、前を向くとぶつかった。相手の背中に顔をぶつけ、奇妙な声を出してしまう。

「い…っ痛…」

鼻を摩り、ぶつかった相手を見る。

「あ、悪い。大丈夫か？」

顔を覗き込んでいく目の前の男に、おもわず後を退く。久遠樹だ。くおんいつき人気者がどうしてこんな所に。

「う、うん！　だ、大丈夫っ…」

端正な樹の顔に赤くなる。

「そうか、ごめんな」

「いいよ。別にどうってことないし」

手を左右に振り言う。

「あ、アンタ…水無月沙羅だろ？」

突然言われた事に対し驚いた。

「へ？　そうだけど……。なんで私の名前知ってるの？」

問い掛けた質問はスルーされ、久遠樹は私を突き刺すような視線を向けてきた。

「アンタ、用心したほうが良いよ……。その匂い、危険だ」

匂い？　私は袖に鼻を近づけ匂いの嗅ぐ。甘い香りも、彼がいう危険な匂いもまったく感じられない。

「？　私なにもつけてないけど……」

私がそう言えば、久遠樹はしまったという顔を見せ口を閉じた。

「っ……とにかく、気をつけた方が良い。じゃあ、な」

そう行つて彼は私からさっさと逃げるように去って行つた。

「……なんなの？」

掴まれた手が何故か、熱かった。久遠樹が急に現れた所為。きっとそうだ。私は自分に言い聞かせるように心の中でそれを繰り返して呟いた。

第5章（前書き）

加筆修正中

4章と話が合いません。
ご了承下さい

第5章

ベッドにごろごろと転がり、私はため息を漏らした。

「はぁ…」

久遠樹に言われた事を思い出し、また赤くなってしまう。——あんな事、言われたの初めて。それに、腕を捕まれるなんて。ポーっとしてしまった自分が恥ずかしい。まくらに顔を埋め、ベッドの上をごろごろと転がる。

「久遠、樹……」

見た者を魅了するような、彼の容姿。一瞬、ほんの一瞬だが見とれた。鋭いような、凜としたような瞳だった。あんな瞳で見つめられたら、私どうなるんだろう。そんな事が頭の中に浮かび、思いつきり首を振る。

「ち、ちがうっ！　ちがうっ！　そんなんじゃないくて…」

一人で訳が分からず、何かに向かって弁解する。わたわたと慌てているうちに、私は眠ってしまった。

そして、朝。カーテンの隙間から零れてくる光に私は目を細めた。いつもと同じ時間に朝食を食べ、明冬を待つ。

「はよー！　はぁー眠い…」

片手を挙げやってきた明冬。

「おはよー。どうしたの？　昨日寝るの遅かったの…？　凄い限だけど、」

「あ——これなあ……ちよっと、父さん達の仕事手伝って…」

「明冬のお母さんとお父さん、忙しいもんね……また、建築のデッサン？」

「まあ……そんなところ」

明冬のお父さんは建築家で、お母さんは学校の先生。そんな親を持つと大変だって明冬はよく言ってる。

「お疲れ様。私が肩でも揉んであげよーか…？」

「いっ、…良いって！ おれそんなに、柔じゃねーし！」

「そお？」

朝早く起きてしまった為、登校時間より少し早く家を出て学校に来ていた。

「昨日は全然、眠れなかった…あのアドレスは間違いだっし。もー、最近寝不足つづきだよ…」

そんな事をブツブツ言いながら廊下を右に曲がろうとしたが、誰かにぶつかり声を上げてしまった。

「きゃっ！」

「うわっ！」

相手のほうも驚いたみたいで、声を出した。声からすると男子のようだ。床に座り込み沙羅は顔を上げる。とそこには真正面に綺麗な顔があり、おもわず後ずさってしまった。

「ははっ、そんなに驚かなくても良いのに…」

その男子は声を出して笑う。そして、私をもう一度見る。さっきまで浮かべていた笑顔を消し、氷のような瞳で沙羅を見据えた。

「そう…そんなに恐がらなくても良いのに。なあ、薔薇姫？」

悪寒が走った。さっきの笑みが嘘のよう…これがこの人の本当の顔なの？　なんて、冷たい瞳。

その男子は沙羅に近づき、頬に手を添え優しく撫でた。沙羅はそのままの状態で口を開く。

「ば、薔薇姫って何のこと？　それに貴方、一体誰なの？」

その男子は沙羅の頬から手を離し言った。

「ああ……紹介が遅れたね。俺の名前は高宮架斐^{たかみやかい}。俺の事は架斐で

いいよ。——薔薇姫。…薔薇姫っていうのは、俺たち——吸血^{ヴァンパイア}

鬼の間で呼ばれている名。伝説の血、人間の中でもっとも極上の血の持ち主。それが——水無月沙羅、お前だ!!」

沙羅はまだ、状況を理解できていなかった。突然、薔薇姫と言われ、その薔薇姫が何なのかさえ分からなかった。それに……気にな

ったのは、目の前にいる架斐が言った言葉。

”俺たち吸血鬼の間

ヴァンパイア

” 吸血鬼なんて、架空の生き物。いるはずがない……。ありえない……。もし、そんなものがあるのだとしたら、信じたくない!!

「信じられない——そんな顔をしているね。でも、存在するんだよ。俺たちが生きているからこそ」

架斐はそう言って、鋭い眼差しで私を見た。まるで、獲物を見つけたような目……。この瞳どこかで？

「薔薇姫……お前の血はどんな味がするのだろうか？」

架斐の口元から微かに見える鋭い牙。それは、人間にはない……人の生き血を啜る為に在るもの。牙は吸血鬼の証し——。

ヴァンパイア

架斐が沙羅の首筋に噛み付こうとした瞬間。一人の女の子が歩いて来た。

それをみた架斐は舌打ちし、沙羅を一瞥し去って行った。沙羅は安堵のため息を吐き、その場に座り込んだ。

第6章（前書き）

加筆修正中

第6章

沙羅は震える足をなんとか立たせ、階段を上った。

ガラッ——。教室のドアを開けるとまだ、誰も着ていなかった。誰もいない事に沙羅は安心し、椅子へ座る。

……まだ、信じられない。まさか——吸血鬼^{ヴァンパイア}がこの世に存在するなんて……でも、アレは幻だったのかもしれない。はあ……そんなに考え込んでも、どうしようもない。吸血鬼^{ヴァンパイア}のことを頭の中から追い払うように、机に顔を伏せ目を閉じた。

昼休み——。沙羅はポツンと消毒液が香る保健室でお弁当を食べていた。なぜなら、沙羅は保健委員だからだ。沙羅が来た時にはもうすでに保健室のドアが開いていて、グチを洩^もらしながら中に入った。ベッドには先客がいるらしく、カーテンがしまっていた。

寝ている人はよっぽど体調が悪いのか、中々起きてこない。心配になり、沙羅はそうっとカーテンを開け声を掛けた。

「あゝ大丈夫ですか？」

「う……」

中を覗いてみれば、男の子がうつ伏せになって呻いている。

「!？」

慌てて、カーテンを全開にする。そこには……蒼溟が噂していた彼がいた。

「久遠樹!？ ……なんでこんなところに」

声を荒げそうになり慌てて口を塞ぐ。

体調が悪いのかな？ 一向に起きようとしな……心配になり私は近寄る。

すごい、綺麗な顔。女の人みたい……なんか、悔しいな。って違う違う!

そんな思いを消すように沙羅は頭を振った、その時。

「っ……はっ……う……」

久遠樹が呻きだした。嫌な夢でも見てるのかな？ 恐る恐る、久遠樹の頭に手を置き、その頭を撫でた。撫でているとさっきより、表情が柔らかくなった。なんか、弟の柚鶴みたい……。最近はこんな事させてくれないからなあ……。沙羅がぼんやりと思っていると、樹が身じろぎして起きた。

沙羅は撫でていた手を止め、腕を引こうとするとその手を樹に掴まれてしまった。

「……誰だ？ お前か？ 俺を撫でていたの……」

「あっ……えっと、その、ごめんなさい！」
怒られると思い、頭を下げた。

「別に……いい」

樹は起き上がり、沙羅と向き合う形でベッドに座った。身構えていると、樹が口を開いた。

「お前……あの時の……」

あの時？ どの時？ それにお前って、私にはれっきとした名前があるんですけど……。沙羅は苛立ちながら答える。

「……私は、水無月沙羅っていう名前があるの！ お前って……初対面の人に向かって失礼でしょっ？」

と、勢いで言ってしまった……。気がついた時にはもう遅く、樹はお腹を抱えて笑っていた。

「……くくっ、はははっ！！ お前、面白いな……」

「……むっ。」

沙羅は頬を膨らませ、樹を見つめていた。

「ははっ……俺の名前は久遠樹。よろしくな？ 水・無・月・沙・羅さん」

沙羅が顔を真っ赤にさせ、樹を叩いたのは言うまでもない。

第7章

沙羅は目の前にいる人物に唾然としていた。沙羅が今いる場所は、保健室。中に入るとそこには——久遠が丸椅子に座ってニコニコしていた。

「……なんで、いるの？」

「暇だから？ それに、一度俺と会ったことあるよな？」
少し引き気味になりながらも沙羅は、質問に答える。

「……どこで？ あっ！ 廊下で？」

「ああ。——お前からは凄く良い匂いがしたからな……」

言葉を最後まで繋げる前に樹は自分の手で口を塞いだ。心持か顔が赤い。その樹の表情に沙羅も頬を紅く染める。顔が赤いことを相手に気付かれないように沙羅は告げる。

「……匂い？ 私、香水なんか付けてないんだけど……」

「違う、香水なんかじゃない——もっと甘くて、誘うような……」
な、何？ 彼の瞳の色が急に……赤く……。沙羅は樹の瞳に目を奪われた。真っ赤な瞳、身を焦がすような……熱い色。

そして、沙羅の肩に樹の腕が置かれ、顔を近づけられる。

キス——される！ と思ったら、樹が首筋に顔を埋めていた。生ぬるい舌が何度も沙羅の首筋を這う。

「……やあ……あっ……」

急な行動に鼓動が早くなる——。もどかしい感覚に体の力が抜け落ちる。

「っ……んっ……」

沙羅は自分の口から漏れている甘い声に、驚き目を見開いた。沙羅の声に我を忘れていた樹が理性を取り戻す。

「……！？ 俺は……何をっ……？」

樹は沙羅を見た途端、顔を真っ青にしてごめんと、呟き保健室を出て行った。

なんだったの？ 今のは……何？ まだ、ドキドキしてる。少しだけど……。でも、あれは架斐と同じことをしていたような……。違う！ ヴァンパイア吸血鬼なんか存在しない！ あれは幻覚だったの……。勘違いだ。そんなことありえない。

沙羅はまだ火照っている頬に手を当て、熱を冷ます。そしてさっきの行為が甦り、また熱を帯びる。自分が自分でないみたいだった。そんな自分に恥ずかしくなった。沙羅は気を取り直し、保健室に来た人の手当てに回った。

樹は己の首、喉を掴みながら悶え、苦しんでいた。

——あの子を噛んでは駄目だ。あの子を噛んでしまおうとした、自分が許せない。香りを嗅いだけで吸血行動を起こしたなんて初めてだ。それほど、強烈な血の持ち主なのか。あの子の声がまだ耳に残っている。そして、心の奥底で思った自分の醜い欲。もっと聞きたいと啼かせたいと思った。あの柔らかだった肌に触りたい牙を突き立てたいと思ったのも事実。そんな事を考えるなんてどうかしてる。俺はあの子に惹かれてるのか？ 否、そんなはずは無い。ただ、吸血行為をしようとしたからだ。吸血鬼は皆、そうだ。吸血をしたら性欲的になる。だけど、俺は噛んではない。なのはどうして……。

悶々と疑問が増えていく。あの子に対しての気持ちと、あの子の香りが——増えていく。もう少しで分かりそうなのに、それが何か分からない。

樹は重い足を上げ階段を上^{のぼ}って行った。

アゲハチヨウは蜘蛛の巣に捕まるのか、糸を切り逃げ切る事が出来るのか。謎は深まるばかり。しかし、蝶はまだ羽を羽ばたかせ始めただけ——。

第8章

沙羅はベッドの上で転がっていた。転がるたびにシーツが皺になつていく。沙羅はうさぎのぬいぐるみを抱きしめ、樹のことを考えていた。

「あゝ……もう！！　なんで、思い出してんのよ私！　あれは……何かの間違いだったのよ！　うう……ただでさえ、面識ないのに……」

思い出すと顔が火照ってくる。――彼の唇と私の唇が……。想像したものを消すかのようにぬいぐるみを振り回す沙羅。そこへ、沙羅の部屋にノックの音が響いた。

「姉ちゃん？　いる――？　ご飯だって！」

聞こえてきた声は弟の柚鶴のもの。

「……わかった。すぐ行く」

一度、ドアの方を見て沙羅は腕に抱えていたうさぎを無造作にベッドに置きドアを開けた。

リビングに行くと、お味噌汁の良い匂いが漂っていた。食卓には人数分のお皿が並んでおり、そのお皿の上にはコンガリ焼きやがったハンバーグが乗っていた。

「わーい！　ハンバーグだ！！」

柚鶴が声のトーンを上げて喜んでいる。柚鶴の好物だもんね、ハンバーグは。そんな柚鶴を見て沙羅は微笑んだ。

「ふうー。」

沙羅は今、お風呂に浸かっていた。肌に心地よいお風呂の温度でもわず声が出てしまう。なんか、のぼせてきた……。もう上がろう。お風呂から上がり、パジャマに着替えていると、遠くの方から救急車のサイレンが聞こえてきた。

「……どうしたんだろう？」

そういえば、家に帰っている途中も救急車を見たような。事件なのかなあと思ひながら脱衣所を出る。

髪をタオルで拭きながらリビングに向かった。リビングには柚鶴と父、茂瑠しげるが、仲良く二人でソファに座ってテレビを見ていた。二人の目はテレビに釘付けになっている。何がそんなに面白いの？ 沙羅は視線をテレビに向けると、死体が写っていた。思っても居なかったものに沙羅は目を見開く。

「――18人目の被害者、〇〇さん16歳が殺害されました。……首筋には二つの獣のような噛み痕あとが残っており――現在、犯人は見つかっておりません……尚、犯人は女子高生ばかりを狙ったものと……」

ニュースキャスターの女の人が説明しているのを聞き、沙羅は眉を潜めポツリと言う。

「吸血鬼”（ヴァンパイア）？」

沙羅の小さな呟きを茂瑠と詩織は聞き、二人は顔を強張らせた。

沙羅は無意識に口に出していたので気付いていなかったようだが……「怖いなあ……。家の近くじゃないか――それに女子高生ばかりだ……沙羅、十分に気をつけなさい。それから、帰ってくるときは誰かと一緒に帰宅しなさい。お隣の明冬くんにでも言っとくか……？」

「……大丈夫。私、そんな軟じゃないの知ってるでしょ？」

安心させるようにお父さんに言ったのだが、まだ心配らしい。

「――そういう問題じゃないんだ沙羅。お前は……」

「あなたっ!!」

茂瑠は沙羅に何か言いかけたが沙羅の母、詩織しおりの声で途切れてしまった。

「何？」

「い、いや……なんでもない。すまん」

そう言ったお父さんの顔はどこか悲しげで寂しそうだった。その表情は何かを抑えているようで……。

「……お父さん？　どうしたの？」

私がそう言うと、お父さんは苦い顔をしてリビングを出ていた。不思議に思った沙羅は母に問う。

「……お父さん、なんか変じゃない？」

「別に普通よ……最近、忙しくなってきたから疲れが溜まっているんじゃない？」

そんな普通に言うお母さんが、なぜか怖かった。何かを隠しているようで……。教えられない事なの？　なんともいえない感情がわき上がって来る。柚鶴はまだ、テレビに夢中。そんな柚鶴を横目に見ながら、沙羅は立ち上がり、寝るねと言って階段を上がった。

第9章

眠れない……。いつもならとくに寝ているはずの時間なのにと時計を見て思う。寝返りをうっても目が開いてしまう。

あの父と母が取り乱すという事はよっぽど重要な事なのかもしれない。両親は私に何かを隠している。でもそれが何なのかわからない。沙羅は夕食に起きた事を思い出していた。考えても、何も答えは出てこない……。沙羅は眠る事を諦め、水を一杯飲むと自室から下のリビングへと階段を降りた。リビングには誰も居ないと思っていたが、明かりが点いている。それに微かだが話し声が聞こえてくる。なんだろうと思い私はそつとドアを開け中を覗いた。覗くと、何か深刻そうな顔で父と母は話していた。

「……あなた、どうするの？ あと5ヶ月経ったら、あの子は……」
「…運命は避けられん。あの子には——歩んでもらうしかない。そうなる事は詩織、お前も分かっているだろう……？」

「……っ！ そうだけどっ……でも!!！」

「詩織」

お父さんが静かな声でお母さんと呼ぶ。お母さんは顔を歪めさせただけで、何も喋ろうとはしない。沈黙……。誰も何も喋らない。心臓の音が聞こえてしまいそう……。今、話していたのは私の事？

「……私も辛いんだ」

お父さんが沈黙を破り話し出す。私は次の言葉を待つ。

「……お前の言う通りだ。あと5ヶ月すれば、沙羅の誕生日がやってくる……」

！？ 私？ 沙羅は父、茂瑠の言葉に驚愕する。

「時が満ちるそのとき、沙羅は真実を目にするだろう……。そして、もっとも私達より辛く苦しい道を歩んで行く……。それまであの子を守ってやらないと……」

「ええ……そうね」

沙羅はその会話を背に階段を駆け上がった。不可解な父と母の言葉。私はどうすればいい？

これから起こる事に恐怖を抱き、沙羅は自分を抱きしめるようにうずく蹲り布団を被った。

昨日の事を思い出し、沙羅は母の顔をまともに見れないでいた。

「沙羅？ どうしたの？ 顔色悪いけど……大丈夫？」

心配そうに見てくる母。そんな母を見て思う。”なんで話してくれないの”喉から出掛かっていた言葉をなんとか飲み込み、私は大丈夫と答え家を出た。

悩んでいる私とは反対にクラスの皆は元気だ。そんなクラスメイ
トを他所にため息を吐いた。

「おはよー…って沙羅!？」

挨拶をしなかった私に対して蒼湮は驚いているのだろう。

「どうしたの？ 何か元気ないよ？ 何かあった？」

そう言っ
て覗き込んでくる蒼湮。

「……なんでもないよ」

無理やり笑って話を変えようとする
と両手で顔を挟まれる。

「にやにすんのっ……!」

「…ふふっ可愛い! 無理やり笑った
って駄目ッ! 蒼湮には分かるんだから!」

「蒼湮……」

そんな彼女は私から手を離し、言う。

「…そんな暗い顔したら、幸せ逃げてくよ〜」

「なっ…! 余計なお世話です〜それに、お返し」

私は蒼湮の頬を掴み伸ばす。

「いひゃい!」

蒼湮ののびた顔を見て私は笑う。不安を消すように……。

「やっと、笑ったね。沙羅には暗い顔なんて似合わないよ」

なんで蒼渥には分かるんだろう。ホントに相変わらず元気だなあ……蒼渥は。でも、それが蒼渥の良い所だ。そんな彼女に私は何度も助けられている。蒼渥が何かあったときは私は解決してみたいなと心から思った。

次は理科か……。

「沙羅！ ちょっと先に行ってて！ 遅くなるから私の分ももってくれる？」

「わかった。じゃあ、先に行ってるよ」

「うん。ごめんね」

そんな会話を交わし、私は教室を出た。廊下を歩いていると、黄色い声援が聞こえてきた。前を見ると久遠が歩いている。だからか……。私は口角をあげ、久遠の隣を通る。すれ違う間際に聞こえた言葉に沙羅は驚き樹の方を振り返る。そんな沙羅に樹は目もくれず背を向け去って行った。

樹に言われた言葉、それは――。

「あのときは、ごめん」

そう言われ沙羅は赤面する。あのとき……それは保健室での事だろう。蒼渥がいなくてよかった。蒼渥の事で紛らわそうとするが、樹の声が耳にこびりつき離れない。でも、温かな気持ちになるのは何故だろうか……。まだ火照っている頬に手を当て沙羅は理科室に向かったのだった。

第10章

6限を終え皆、帰宅準備やら部活動に行く用意をしていた。その教室に一人だけ机に顔を伏せている者が居る。それは沙羅だ。授業が終わっても一向に顔を上げようとはしない。そんな熟睡している沙羅の側に少女がやって来た。蒼湊だ。蒼湊は沙羅を起こそうと体を揺さぶるが、疲れているが中々起きない。蒼湊は沙羅に痺れを切らし大きな声で叫ぶが無反応。

「沙羅!! ……起きないし。しかたない、手紙に書いておこう」
蒼湊は手に持っていたペンケースからメモ帳を取り出し、その紙に何かを書き込む。紙には丸っぽい字で、こう書いてあった。

【沙羅へ

私、急に部が入ったから一緒に帰れなくなっちゃった……明冬とは先生に呼ばれているから無理だって言ってたよ。本当にごめん!!

蒼湊より】

紙を沙羅の手に持たせ急いで蒼湊は教室を出て行った。

沙羅が目を覚めたのは放課後。辺りを見渡すとすごく暗い。教室に掛かっている時計を見ると針は午後6…30を指していた。

もうこんな時間かと思い、手を動かそうとして何か違和感を感じた。不思議に思い掌を開けてみると、丁寧に四つ折りにされた紙があった。中身を見てみると……一緒に帰れないことが綴られていた。今日は一人か——…と思い私は窓の外に目をやる。

素早く鞆に教科書や参考書を入れ、沙羅は席を立った。外はもう暗い……集会で言っていた吸血鬼事件の事も在るし……一人で帰るのは心細いけど。私が寝ていたから自業自得だよ。

沙羅は鞆を肩に掛け早足で下駄箱に行き、靴を履いた。背後を気にしながら学校を出る。

道の所々にある蛍光灯がチカチカと点滅している。今日の集会で言われた吸血鬼事件の事が脳裏を掠める。

”皆さんに集まってもらったのは、ニュースでよく耳にする吸血鬼事件の事です。これはまだ犯人が見つかっていないそうです。ですから……今後、一人で帰らないように。帰宅する時は必ず複数の人数で……” 細い道に響いている沙羅の足音。沙羅がしばらく歩いていると微かに沙羅の足音とは違う音が聞こえてきた。沙羅が後ろを振り返ると人が着いて来ている。言葉には言い表すことの出来ないモノが這い上がってきた。相手に気づかれないように早く歩いても相手は黙ってついてくる。沙羅は後ろに気を取られ、前に居る人物に気がつかなかった。そして気づいたときにはもう遅く、沙羅は両腕を拘束されていた。

二人！？ 近づいてくる音さえしなかった……。まさか、吸血鬼事件の犯人はこの人たち！？

「……っ！ 離してっ……」
腕を掴んでいる手を離そうともがいても、相手は黙ったまま沙羅を見ている。二人のは男は深くフードを被っている。表情を見ようとすることが出来ない。

沙羅は自分が殺されるかもしれない事に目に涙を浮かべる。それを見た男達はニヤリと笑う。沙羅を拘束していた男が沙羅を地面に叩きつける。

「……っ！！」

転んだ拍子に膝から血が出た。甘美な香りが男達の鼻腔をくすぐる。誰も嗅いだ事のない血の匂い。甘い甘い魅了するような血が出た。たん男達は目の色を変え、舌なめずりをした。そのとき口元から妖しく光った白い尖った歯。それは犬歯のように鋭く獣の様。

——吸血鬼！！
沙羅は変貌した男達を見て動けずにいた。腰が抜けて立てない——。踏ん張ろうと、手で何とか立つが直ぐに座り込んでしまう。そんな動けない沙羅を見て男達はさらに笑みを深め、沙羅の血を飲もうと牙をむき出した。次に来る痛みに耐える

よう沙羅は目を瞑る。が、痛みはない。どうして、何が起こったのか状況を見ようと目を開ける。そこには、男達を真っ直ぐ見つめた樹が沙羅を庇うように立っていた。

「……っなんで……」

樹は沙羅を一瞥しただけで冷たく男達を見ている。何ともいえない空気がその場を漂う。有無を言わせない威圧感が男達をひれ伏せる。

「……お前達はなんだ？」

静かに樹は言った。保健室での喋り方とまるで違う。沙羅は目の前にいる樹を不思議そうに見つめた。

「……ッ私たちは、あるお方にそこにいる少女を探し連れて来いと命じられただけですっ……」

「それは誰だ？」

「……いえません」

男がそう口を開いた瞬間、風のようなものが男の腕を切った。血しぶきが地面に転々と広がり、血しぶきは沙羅のいるところまで飛んできた。樹は頬についた血を親指で拭きその指に付いている血を舐めた。その姿は女の沙羅かも見ても妖艶なもので沙羅は目を逸らした。

「……っ！ お許しくださいっ樹様！！」

男は腕を押さえ、許しを請う。それは樹が許すはずもなく樹は男を冷たく見据えた。そして男は苦しそうに、見えない何かを取るように首を掻きまわった。だんだん、男は青白くなり血の気が失せていった。

沙羅は自分の目の前で起きている事が信じられないのか目を見開いたままその様子を見ている。

「——消えろ」

男達は額に脂汗を垂らし霧のように消えていった。

「大丈夫か？」

樹が沙羅に手を差し出すが沙羅は後退っただけで、その手を取ろうとはしなかった。一瞬、樹の瞳が寂しそうに揺らぐ。それを見た沙

羅はいたたまれない気持ちになったが、その考えは振り払った。

「……俺が怖いかな？」

「……」

わからない……でも、久遠は私を助けてくれたんだよね？

沙羅は声を絞り出すように樹に告げた。

「……わか、らない……でも、ありがとう」

まだ、体は震えている。それを樹に気づかれぬように沙羅は拳を作る。

「……血。出てる」

樹は沙羅の膝を見て呟いた。そして、ポケットからハンカチを取り出し沙羅に向かって投げる。それを沙羅は慌ててキャッチし樹とハンカチを見比べ、観念したように血を拭いた。沙羅は血を拭きながらずつと疑問に思っていたことを樹に問う。

「……あの。さっきの人たちは？ それと貴方は何？」

何だか、よそよそしく喋ってしまう。沙羅の言葉の裏に隠れているもの……それは言われなくても樹にはわかっていた。沙羅が言わんとしていることを――。

” 貴方は人間なの？ 吸血鬼なの？ ” 沙羅が思っている事はこ

の事だろう。樹は平然と答えた。

「…俺は、人の生き血を啜る吸血鬼だ」
ヴァンパイア

その言葉に私はドキッとする。樹はそんな沙羅を見てふっと笑う。

「……それが、普通の反応。人間は吸血鬼を嫌い拒む――」
ヴァンパイア

遠くを見つめて樹は昔を懐かしむ目をした。けれど、その瞳は悲しさなどが入り混じったもの。

「……っ！！ じゃあ、貴方は私を襲わないの？」

「…さあな？ 襲うかもな――？」

樹が牙を出して笑えば沙羅は身を硬くする。

「はははっ……！ 怖がればいい！ 俺を拒めばいいっ！ この化け物をっ！！」

樹は冷たく笑う。

沙羅は狂った様に叫ぶ樹を目にし、そしていつもとは違う樹に不安を覚え、鞆を抱え走り去った。

「……これでいいんだ」

それで良いはずなのに何でそんな泣きそうな顔をする？ 他の奴らなら……憎しみを籠った目で嫌った目で見れば俺を見るはずなのに。なぜそんな。最後に見せた沙羅の顔。それが瞼の裏に焼きついて消えない。

何かもやもやとしたものが霧のように心を埋め尽くす。いつもなら、ちゃんと切り分けられるのに、どうして苛立つのだ？ 水無月沙羅だからか？ 傷つけてしまったと後悔しているのか？ この此処を埋め尽くしているものが何なのか樹には分からない。そして、樹は真っ暗な空を見上げた。その空は今の樹の気持ちを表しているかのように、樹は目を逸らした。

——抗えぬ血。その血が流れる限り輪廻は続く。永遠に続く輪廻だからこそ、綺麗で汚れの無い澄み切ったものになる。

廻り巡り逢い、人はまた出会いを繰り返す。『運命』それは途切れない糸で繋ぎ合わされる。運命とは時に残酷で儚く美しい。

第11章

沙羅は無我夢中に走っていた。家が見えてくると沙羅は逃げるように玄関に入り、直ぐ鍵を閉めた。力が抜けたように沙羅はズルズルと座り込んだ。

「はあっ……はあっ……」

息を正そうとゆっくり空気を吸うが苦しい。余りに苦しくて私は咳き込んだ。それに目尻が熱い――。視界がぼやけるのは走ってきたからじゃない……。この涙は何の為のもの？ 私を襲ってきた吸血鬼^{ヴァンパイア}が怖かったから？ それとも初めて見る久遠の表情に恐怖心を覚えたから？ あの冷たい微笑みと声。あれは久遠じゃなかった。――あんな久遠知らない。私が知っているのはいつも気さくに話してくれる久遠。

色々な感情が混ざり蛇のとぐろのように恐怖や不安が沙羅の心の中を渦巻く。

「……違うっ！ ^{ヴァンパイア}吸血鬼なんか居ない！！ あれは幻よっ……居る

訳っ！！」

沙羅は叫ぶが膝の痛みが疼き、現実を起こったことだと物語っている。私は痛む膝に視線を向け、気付いた。自分が握り締めている手の中に黒い布のようなものが少し顔を覗かせている。掌をゆっくり開いてみると、血がこびりついたハンカチがあった。強く握り締めていたからかハンカチは皺くちやになっている。

これ、久遠がくれた……ハンカチ。くれたものじゃないけど。私の血が染み付いてる。洗わなきゃ駄目だよ……。沙羅はさっき自分の身に起きた事を思い出し、おもわず体を抱きしめる。沙羅にはなぜか確信があった。樹は吸血鬼^{ヴァンパイア}だが、自分を襲った男達^{ヴァンパイア}と違う事を……。このハンカチを持っても仕方が無い。久遠に返すべきか返さないべきか……。沙羅はハンカチをじっと見つめながら考える。悩みに悩んで私は決心した。よし、明日返そう。迷っててもし

ようがない。

沙羅はふらふらと立ち上がり、靴を脱いで家に上がった。着替えもしないで沙羅は洗面所に向かう。蛇口を捻り水を出す。そこに血の付いたハンカチを手で揉み血を落とす。数分もしないうちにハンカチは元の色に戻っていた。そしてストーブの側に洗ったハンカチを置き乾かす。ほどよい温度とストーブの上に置いてあるヤカンの音が沙羅を眠りへと誘う。沙羅はソファに身を預け瞼を閉じた。

食欲をそそる匂いが沙羅の鼻をくすぐった。暖かい光に目を細め、沙羅は起き上がった。いつのまにか自分の上に毛布がかけられていた。

「あら？ 沙羅起きた？」

「……ん」

沙羅はぼんやりとした目で詩織を見る。

「もうすぐ、ご飯ができるわよ」

「お母さん……？」

「んー？ 何？」

「毛布、ありがとう」

「なに言ってるの。いつもの事でしょ？」

そう言っ母はまた、フライパンにのっている野菜を炒め始める。何も無かったように母は動いている。その事に安堵して私の涙は堰を切ったように流れ出した。沙羅は怖かったのだ。自分の身に起こった事が。薔薇姫などと訳の分からないことを言われ、自分では何もできない事を沙羅は知った。

母に気付かれないように顔を伏せていたのだが気付かれてしまった。私はなんでもない、大丈夫だよと言いながらその場をやり過ごした。何気ない、お母さんの優しさが嬉しかった。そして沙羅は涙を拭き顔を綻ばせた。

制服を鏡の前で正し、気合を入れる。自分に大丈夫と言うように。

沙羅はハンカチが入っている鞆を何度も見つめながら歩き出した。
今は3限目の現国。窓の外を見ながらハンカチの事を考える。考
えていると隣の明冬が紙を回してきた。紙を開くと、

『何悩んでんの？？　　すげー百面相　笑　by　明冬』

……百面相って。私そんな顔してるの？　紙を渡してきた張本人を
見ると、面白そうに私を見て笑ってる。そんな明冬を見て沙羅は紙
に書き込む。その書いた紙を明冬に渡す。

『あっそうですかー！　悪かったわね、百面相で！！　ちよつと質
問して良い？　沙羅』

明冬は綴られた文字を読み取る。読み終わり明冬は沙羅を見つめる。
『質問って？』

『……吸血鬼^{ヴァンパイア}って信じる？』

沙羅は明冬の表情を伺う。顔が俯いているせいで読み取れない。
少しの間、沙羅と明冬の間には妙な空気が流れた。しばらく待ってい
ると、明冬がペンを動かし始めた。彼も何か知っているのだろうか？

『……………はっ？？　沙羅、頭大丈夫か？？　吸血鬼^{ヴァンパイア}？　そんな
もんいるわけねーだろ？　笑笑』

恐る恐る紙を開き、私は落胆する。何を期待してたんだろう。そ
れでも、納得行かない私はまた、紙の上にシャーペンを走らせる。

『でも！　追いかけて、噛まれそうになったんだよ！？　ちゃ
んと牙も見だし、それにあの赤い……全てを魅了するような瞳だ
って見た！　これが嘘だって言うの？』

『……夢だよ、夢！！　疲れてたとか熱でも出して幻覚みたんじゃ
ね？』

『そう…だよ。吸血鬼^{ヴァンパイア}なんているわけないもんね……。ごめんっ
！　ヘンな事聞いて！！　嘘だよー（笑）』

頭を横切った淡い期待は泡となって消えていった。
そんな思いを無理やり消すように私はニヤリと笑いながら明冬を
見た。一瞬、ポカンとした明冬の顔があまりにも可笑しくて私は笑
った。笑うと明冬に頭を叩かれた。叩かれたところをさすりながら、

私は音読している先生の声に耳を傾けた。

心の奥底で期待してたんだ。でもそれは違った。明冬が分かってくれる、信じてくれると勘違いをしていた。勝手に決め付けていた。一人で不安を抱えるという事はこんなにも苦痛で悲しいだけなんだと私はこのとき初めて感じた。

一滴、沙羅の瞳から涙が零れ落ちる。それは明冬にも気付かれずに、静かに煌きながら沙羅の制服のスカートに小さなシミを作った。

あの吸血事件はあの日を境に他の女の子が犠牲になる事はなかった。私という存在のせいで、たくさんの女の子が犠牲になった。なんで、私は何も出来ないんだろう。自分が無力と知り泣きたくなかった。沙羅は手を握り締めた。痛みが手から体に伝わってくる。こんな耐えられるような痛みではなかったはず。18人の叫び声が今でも聞こえそうで、沙羅は瞳を閉じた。瞼を閉じれば聞えて来る、風の音や人の話し声。目を開けば、見えてくる。太陽や空。そんな風景や自然を感じる事が出来なくなるなんて、私には耐えられない。沙羅の目尻から大きな粒が流れ落ちた。

「…ごめんなさいっ…本当に…」

涙を拭き、泣き腫らした目で沙羅は空を見上げた。泣かないように、犠牲になった人たちの分まで生きようと、空を見上げた。

第12章

沙羅はトボトボと傘を差しながら道を歩いていた。時折、車が沙羅の脇を通り溜まった水が飛沫を上げ沙羅のローファアを濡らす。濡れた靴に眉を寄せ黙ったまま沙羅は黙々と家へと歩き続ける。

雨は一向にあがらない。少し小降りになってきたかと思うとまた激しく雨は降る。そんな身勝手な天気には私は苛立ちを覚えた。家に着くとさっきまで差していた傘をたたみ、傘についている水滴を落とす。びしょびしょになったローファアを持ち、リビングのドアを開け靴を持ったまま古くなった新聞をゴミ箱の隣に置いてある箱から取り出し広げる。

広げた新聞紙の上にローファアを置きストーブの前で乾かす。そういえば、昨日もこんなことしてたっけ……。ストーブを見てぼんやりと思い出す。ハンカチは久遠に渡せなかったけど。渡せなかったんじゃない。渡すのが怖かっただけ。また、襲われる、噛まれると思うから。はあ……。私って弱気だなあ。ただ、ハンカチを返すだけなの……。怖いものはしょうがないよね。

沙羅は何かを思い出したように立ち上がった。沙羅が向かったのは自室。部屋のドアを開けると机の上に柚鶴から借りた吸血鬼の本が無造作に置かれていた。沙羅はその本の背表紙を確認し手に取る。本の目次を開くと、吸血鬼^{ヴァンパイア}について、吸血鬼の姿、吸血鬼伝説^{ヴァンパイア}などいろいろな事が書かれている。私は最初に目に付いた吸血鬼についてというページを捲った。前にも呼んだことのあるページだが何かあるような気がして私は目を通した。

沙羅は読み終わると本を閉じた。いつのまにか私は掌を強く握り締めていた。手を緩めると微かに汗をかいている。掌を見つめていると、自分が制服を着たままだということを思い出し、楽なジャージとパーカーに着替えた。

制服をハンガーにかけていると、ポケットの中にあつた携帯が音

を出して震えだし沙羅はビクリと方を上げる。

「うわわっ……！」

何だろうと、携帯の画面を開くとそこには着信の文字が並んでいた。着信は母からだった。私は着信を押し、母へと電話を掛ける。

《はい？ あ、沙羅？》

「うん。そうだけど……何かあったの？ 電話入ってたから」

《ああ！ その事なんだけど。お母さん、残業入っちゃって……お父さんも遅くなるって言ったし、帰りは多分9時過ぎになると思うわ。悪いけど、晩御飯作って食べてくれる？ うっかり言い忘れてたわ。それと……沙羅、今一人なの？》

「うん。一人だけど？」

沙羅は一人では何か問題があるのかと不思議になりながら詩織に尋ねる。

《……柚鶴は？ 一緒にいるの？》

「まだ帰ってきてないけど……？」

《そう……。——沙羅》

お母さんの声が急に真剣な声音に変わった。何かあるのだろうか？

《良い？ ——よく聞くのよ？》

「う、うん」

まるで、小さい子供に絵本を聞かせるように詩織は沙羅に言った。

《……お母さんが帰ってくるまで家かえから出ないでね。絶対よ……》

命令口調で念を押すようにお母さんは私に言った。そこで携帯は切れた。

どういうこと？ 私ヴァンパイアが吸血鬼に襲われそうになった事と関係があるのだろうか？ それをお母さんは知っている？ ——否。そんなはずはない。第一、知っているはずがない。吸血鬼が実在すると言ったら間違いなく、母は否定するだろう。でも、——一体、何故？

沙羅は手元にある白い携帯から目を上げ、部屋の窓の外を見た。

雨はまだ降っている――沙羅の疑問を覆い隠すように、雨は振り続けている。

第13章

チョークを片手にそして右手には歴史の教科書を持った先生が何かを言っている。その様子をぼんやりとした目で見て、私はノートに目を落とした。真っ白な何も書かれていない綺麗なノート。その白いページに書き込む。「薔薇姫」と。これがどんなものなのか、何を意味するものか私は分からない。幾度無く考えても答えは見つからぬまま。沙羅は無意識のうちに掌を握り締めていた。

あの夜の日から、沙羅は樹に会っていない。ハンカチは返さなければいけないと思って、後一步と言うところで足がすくんで動けなくなってしまうからだ。それに樹と面と面を向かって会わないと意味が無い。樹と会って話すのだ。そして「薔薇姫」のことを聞く。どうして、自分が吸血鬼ヴァンパイアから襲われるのか、薔薇姫とは何なのか、それを聞くために樹に会わなければいけない。



「なあ……樹」

樹は頬杖をつき、目の前にいる男——武藤天真むとうてんまを見た。天真の隣には少し切れ目で眼鏡の男がいる。泉神楽いずみかぐらだ。本を片手に教室の壁によしかかり天真と樹のやり取りを黙って聞いている。

「なんだ？」

神楽と天真は沙羅が襲われた事を知っていた。そのことを樹から聞いていたからだ。最初、樹の口から女の子の名前を聞くとは思っても居なかった。それに樹は顔色が悪い。他人から見ても樹は何か——悩みか？ を抱えているようだ。そんな樹に心配になり、思っていた事を樹に言う。

「大丈夫か？」

「……大丈夫に決まっているだろう？ なんだ？ お前が俺を心配す

るなんて珍しい」

樹はいつも通りに答えたが、天真は樹の嘘を見抜く。

「ふーん。」大丈夫”ねえ……。お前、鏡で自分の顔見てくれれば？」
天真に同意するように神楽が読んでいた本を閉じ樹を刺す様に見つめた。

「天真の言う通りだ。樹、あの子の事が心配で堪らないって顔に書いてある。それにその子、今までの子達とは違うんじゃないのかい？」

「……っ！」

樹の脳裏に沙羅が最後に見せた、あの悲しみと怒りが入り混じったような表情が浮かぶ。いまさら後悔しても遅い。あれは仕方がなかったんだ。思ってた樹は気づく。仕方がなかった——？ どうして、そんな事を思った？ 俺は吸血鬼だヴァンパイアと明かしたくなかった？ そうだ、俺はバレらしたくなかったんだ。あの悲痛な顔を思い出すたび罪悪感に浸っていく。あの少女のことが忘れられない。そんな事今までなかったのに。そして樹は沙羅に対して、初めて抱いだいた感情。それは——沙羅を守りたいという気持ち。その思いが樹の心を満たしている。

樹は今まで自分が吸血鬼である事を見せ、何度も人間と触れ合うのを避けてきた。それは間違いだと樹は気づく。でも——。沙羅に拒否されるのではないか、その不安が樹の威勢を押し潰すようにそれは樹の心に重く押し掛かる。

そんな樹の迷いを遮るように天真は言う。

「心配なら行けよ。あの子の所に……。それにアイツが——高宮架たかみや斐かいが関わっているんだらう？」

「……ああ」

「まずは行動するべきだ。そうだろう？ 樹？」

神楽はずれていた眼鏡を人差し指で押し上げ、不敵な笑みを浮かべる。三日月型になった口からは鋭い牙が見えた。——吸血鬼ヴァンパイアの牙。樹は神楽の牙を見て思った。俺達は人間じゃない。神楽も天真も俺

と同じように卑しい尖った牙を持ち、生き血を啜るのだ。容姿さえも不気味で美しい美貌。それが吸血鬼ヴァンパイアなのだ。そして本性を剥き出しにすれば人は皆、逃げて行く。そんな事、俺達は望んでいないのに。



頭がガンガンする。風邪だろうか？ 沙羅は痛む頭を抑え授業を受けていた。授業に集中しようとするが、頭痛がそれを邪魔する。沙羅は痛さに我慢できなくなり、席を立った。そして先生に頭痛がするから保健室に言っても良いかと問う。

「大丈夫ですか？ 気分が悪いのならどうぞ」

そう言った先生に頭を下げ、保健室に沙羅は向かった。

保健室に入ると保健の先生が居ない。先生が来るまでベッドで休んでいよう。沙羅はベッドに潜り込み、体を横に倒す。しばらく横になっていると足音が聞こえてきた。沙羅は先生だと思い、体を起こす。

「あ、先生っ」

沙羅はカーテンを引いて先生を呼ぶが反応が無い。不思議に思い、顔を出すとベッドに押し倒された。

「!？ きゃっ……」

誰だと思って顔を上げると、

「た、かみや…かい…」

高宮架斐が沙羅を見下ろしていた。妖しげな笑みを浮かべて。

第14章

架斐は沙羅を見据え言った。

「ラッキーだなあ……沙羅ちゃんとうとうしてまた会えるなんて、本当に嬉しいよ」

架斐は沙羅に笑みを見せるが、沙羅は黙ったまま何も言わない。否、言えないのだ。

「それよりさあ……？　なんで、沙羅ちゃんがこんな所にいるの？　保健委員なのは知ってるけど……」

まさか、本当に気分が悪いのかな？　それだったら、俺が介抱してあげようか？」

架斐は妖艶に微笑み、沙羅に見えるように牙を見せた。忘れていた。この人も吸血鬼である事を。

「……っ！！」

沙羅は声にならない叫びを出す。沙羅は後退るが架斐には意味の無い抵抗に等しい。沙羅の両腕を架斐は片手で拘束し、そして頭上へと持っていく。架斐の行動に驚き沙羅は目を見開くが腕を動かそうにも動かせない。……どうしよう？　腕は掴まれたままだし。なんとか、架斐から逃げようと辺りを見渡すが何も無い。悩んでいると、架斐が沙羅の胸ボタンに手を掛けた。

「……っや！」

驚いて声を出す架斐は慣れているのか平然としている。架斐は沙羅の抵抗するのも楽しそうに眺めて次々とボタンを外していく。私、どうなるの？　このまま高宮架斐に血を吸われて吸血鬼になるの？

それとも……嫌っ！！　絶対、嫌だ。高宮架斐に犯されるなんて……。脳裏に浮かんだ事を消すように沙羅は頭を左右に振る。

架斐は沙羅の顎を掴み、無理やり自分のほうへと向かせる。すると沙羅の白い首筋が露になった。架斐は顎から手を離し沙羅の首筋のラインをなぞる様に優しく触れる。沙羅は架斐の手のもどかしさ

に声を上げた。

「……んっ」

自分のものとは思えない声に沙羅は顔を真っ赤に染める。……いまのって、私の声？

「くすっ…可愛い声。そんな顔をしてるって事は……まだ？」

沙羅は自分が処女だと架斐に言われ、これでもかっというぐらい赤くなる。

「俺が相手してあげようか？ 沙羅ちゃんだったら俺、大歓迎だよ？ ……どう？」

「……最低っ！ 体だけなんて信じられないっ……バカにしないでっ！ 私は好きな人じゃなきゃ嫌！！ 誰が貴方となんかっ！」それも吸血鬼なんてもってのほかだ。沙羅は架斐を睨みつける。

「ふーん。沙羅ちゃん、好きな人いるんだ……。どんな人？ 人間？ それとも……吸血鬼？ まあ、どうでもいいけど」

——『好きな人』その四文字の言葉が頭の中をぐるぐると回る。言われたとき、私は誰の事を考えた？ なんで、久遠が浮かんでくるの？ 私は久遠が好き？ 何故、久遠の事を思ったら胸が焦げるように熱くなるの…？

そんな困惑している沙羅を見て架斐は声を出して笑う。

「やっつと、捕まえたよ？ 薔薇姫」

架斐の瞳はどんどん紅くなっていく。吸血鬼が獲物を捕らえる時の目。忘れるはずが無い。この瞳がどれほど恐ろしいか、自分がよく知ってる。沙羅は必死に抵抗するが叶わない。

「無理だよ？ どんなに俺達の力に抵抗しようっていても……人が吸血鬼に勝てるはずが無い」

そう言って架斐は冷たく沙羅を一瞥する。あの時と一緒……。どうして、この人はこんな冷たくて悲しそうな顔をするの？

架斐の見透かすような紅い瞳から目を逸らそうと沙羅は顔を背け、目を瞑った。それがいけなかったのだ。沙羅が首を振った時、首筋が架斐の目の前に晒された。それを架斐が見逃すはずも無く。架斐

は白い首筋に唇を寄せ首に舌を這わせた。気持ち悪い。

「……やっ！ やめっ……あっ」

架斐は沙羅の太ももを撫でた。予想通りの反応に架斐は笑みを深める。そして、薔薇姫である沙羅の肌の匂いを堪能する。その肌の下を通る赤い血。それは吸血鬼ヴァンパイアを誘う甘うい媚薬。早くその赤い血を吸血鬼ヴァンパイアの喉を癒す事が出来るのは血だけなのだ。そして、架斐が牙を突き刺そうしたその時。

——バンッ！ 保健室のドアが音を出して勢いよく開く。ドアを開けたのは誰なのか沙羅には分からない。しかし架斐は分かったのか、噛み付こうとしていた首筋から顔を離し眉を寄せ、カーテンの向こうに居る人物を睨みつける。架斐がカーテンを開けるとそこには、樹が立っていた。沙羅は予想していない人物に目を見開く。樹は二人を冷たくを見下ろしていた。

第15章

樹は沙羅と架斐が一緒にいるのを見て眉を潜める。

「その子から離れる。高宮」

架斐は樹に不敵な笑みを浮かべ樹を見上げる。

「嫌だ」と言ったら？」

「……」

その言葉に樹は架斐を睨み付けた。

「あーあ、王子様のご登場ってわけね。わかったよ。俺は退散させてもらうよ。……でも、」

最後に小さく何かを樹に呟き架斐は保健室を出て行った。沙羅はその二人のやり取りを怯えた目で見つめていた。

樹は沙羅が何もされて居ないのを見て、安堵した。まだこちらを不安げに見ている。沙羅が樹を見上げたその時、樹は気づく。沙羅の全開にされている首元のボタン。それを見て悔しげに樹は唇を噛んだ。もう少し遅かったら……目の前の少女は間違いないく壊れていただろう。もっと早く来ればよかったと後悔する。

「俺は……何にもしないから——」

樹は沙羅に近づこうとするが、沙羅は肩を震わせ後退るだけ。そんな沙羅を見て樹は悲しくなる。でも、そうしたのは自分だ。悔やんでも意味が無い。

沙羅は赤くなった手首を見つめた。これはずっと架斐に掴まれていた証拠。いまでも思い出すだけでも身震いがする。どうして自分が何度も吸血鬼ヴァンパイアに襲われなければならないのか。目の前に居る樹に沙羅は疑問や薔薇姫の事を聞きたいが口がなかなか開けられない。架斐にあんな行為をされたのだから無理も無い。それに、自分を悲しげに見下ろしている人——樹も、さっき自分を襲おうとした吸血鬼ヴァンパイア架斐と同じなのだ。でも、違う事は知ってる。樹は何度も助けてくれたのだ。沙羅は恐る恐る樹を見上げた。見上げた時に映った樹の

瞳の色。紅い……。赤。架斐にされた事がフラッシュバックする。

「……やだっ！ こないでっ…化け物っ…！！」

そして沙羅は自分を守るかのように自分を強く抱きしめる。沙羅は慌てて口を塞ぐが遅かった。発せられた言葉はもう取り消せず、二人の間に沈黙が流れる。樹は沙羅に言われた事とその姿に掌を握り締めた。

「…ごめん。もう…君の前に現れないから」

悲しげに顔を歪め、樹は沙羅に背を向け出て行った。

シートから目を見上げて樹が出て行ったドアを見つめた。じわじわと涙が溢れ出してくる。あんな酷い事を言いたかったんじゃない。気がついたら私は口を開いて叫んでいたんだ。

「違うのにつ…！！」

もうそこにはいない人に叫ぶ沙羅。樹を追いかけたいのに足が動かない。体はまだ震えたまま動こうとしない。駆けつけて謝りたいのに…。吸血鬼だからなんだというの？ 私が人間だから何？ そんなのは関係ない！

そう。関係ない。この気持ちも悲しさも全部…。久遠にあんな顔させたくない。いつも私に見せてくれたくったくのない笑顔が見たい。そう思って気がつく。私は久遠が好きなんだ。

沙羅はベッドを飛び降り、樹を探しに走り出した。

第16章

「はあっ……はあっ……」

沙羅は保健室を飛び出して直ぐ、樹の教室に向かった。教室のドアを開け中に入る。そこには誰もいなかった。もう授業が終わったのだろう。でも、久遠は何処に居るの？ まさかもう帰ってしまったの？

そんなはず無い！ 何故か沙羅は確信が合った。

校内、玄関、廊下、渡り廊下、他の学年の教室、図書館、体育館など一通り行って見たが、久遠は居なかった。私は仕方なく鞆を持って学校を出た。家に帰ると見慣れない靴があり、不思議に思っリビングに向かうと、明冬が椅子に座っていた。明冬は沙羅に気付き手を上げる。

「おっ！ お帰り、沙羅。大丈夫か？ 体調……」

「えっ……うん。もう大丈夫」

沙羅はそう言って無理やり微笑んだ。その不自然な沙羅の笑みに明冬は眉をひそめた。

「体調？ どうかしたの？ 沙羅？」

不安げに詩織が言う。

「大丈夫、大丈夫！ 元気だよっ」

なんでもないといった顔で沙羅は詩織に言葉をかける。

「——そう。それなら良いんだけど……また何かあったら、絶対、私達に言うのよ？」

「そうだぞ。沙羅」

ソファに座っていた父、茂瑠も頷く。そんな二人に弾圧されながらも沙羅は言った。

「う、うん……わかった。——さっきから気になっていたんだけど、なんで明冬が家うちにいるの？」

沙羅の問いかけに詩織は思い出したように答える。

「ああ：それはね。明冬くんのお母さんがケーキを焼いたから、どうぞって：おすそ分けて持ってきてくれたのよ」

「そっか。明冬のお母さん、お菓子作り上手だもんね」

納得したように沙羅がいうと沙羅達の横でテレビゲームをしていた柚鶴は声を出してはしゃぐ。

「じゃあ、切りましょうか。皆も揃っている事だし……！ 明冬くんも食べてくでしょ？」

詩織は明冬が首を縦に振るのを見てケーキのような皿を取り出した。

「なんか、この頃沙羅、元気ないよなー」

玄関で靴を履きながら明冬は沙羅に言う。不意をつかれ、沙羅は素っ頓狂な声を出す。

「へっ？」

「だから……お前らしくねえっていったんの！」

照れたように頭を掻きながら、明冬は言った。

「…や、やだなく！ 私、そんな顔してないよっ……！ いつも通りだってば！」

沙羅はそう言った途端、明冬が目が真剣になった。いつもとは違う明冬に沙羅は一瞬たじろぐ。

「…いつも通りなんかじゃねえよ」

明冬は沙羅の腕を掴みに自分の方に抱き寄せた。沙羅は体制を崩し、明冬の方に体が傾いた。明冬はそれを支えるように、優しく沙羅を包み込む。

「……っ!？」

「——無理なんか、すんなよ……」

沙羅は驚いたように明冬を見上げる。どうして、自分の押し隠している気持ちが分かったのか……。バレていないと思っていたのに。どうして。

沙羅は明冬のことを思っている事を読み取ろうと、もう一度、明冬を見

上げた。

第17章

「……明冬？」

沙羅は不安そうに明冬を見上げ問いかける。

沙羅の純粹無垢な瞳を見て明冬は戸惑い、目を逸らす。そして、抱きしめていた腕をゆっくりと解き、沙羅を離した。

「……ごめん……俺……」

何かに堪えるように、抑えるように明冬は言葉を紡ぐ。

「……お前が無理してる、姿なんて見たくない……沙羅にはずっと、笑っていて欲しいんだ。だから、無理なんかすんな……。何か、悩みがあるなら俺に言え。な？」

私の顔を覗き込んでくる明冬に、言葉にズキリと胸が痛む。悩みが無いわけではない。ヴァンパイア吸血鬼の事や、お父さん達が何かを隠している事。でも、その事を明冬に言う訳にはいかない。——だって明冬は、ヴァンパイア吸血鬼なんて居ないと思っている。そんな何も知らない人を、巻き込んで駄目。自分の意志で勝手に決めてはいけない。

「……何も、ないよ？　ほんとだってば！　ほら、そんな顔しないっ！　私は大丈夫！」

「……っ……分かった……。でも、何かあったら必ず、俺に言え。絶対隠すなよな？」

ほんの一瞬、明冬は顔を歪めたが何も無かったように、沙羅に笑みを見せた。

「うん……じゃあ、明日ね」

沙羅が別れを告げると明冬は背を向け、じゃあなと言って玄関を出て行った。閉まってしまった玄関のドアを見て、沙羅はポツリと呟いた。

「……ごめん。明冬……嘘なんか、吐いてっ……ごめんっ……明冬っ」

気持ちとは逆の言葉。直ぐに後悔の念が押し寄せてくる。沙羅はずるずると座り込み、嗚咽を漏らした。その涙は不安と罪悪感の塊

だった。



「うわー…真っ暗。こんなに遅くまで、沙羅の家にいたのか……」
明冬は光、煌く星を見てため息を漏らす。その星を見て、ふと彼女が浮かぶ。さっきまでこの手に抱きしめていた彼女。あの時微かに香った薔薇姫の——誘惑する様な薔薇の香り。人間の俺さえも、狂うような匂いだった。それは沙羅を薔薇姫だと証明付けるもの。その事実^に明冬は唇を噛んだ。——そう。明冬もまた、薔薇姫を知る一人だった。

「……絶対に、守ってみせる」
強く、強く心に願う。

真っ直ぐな沙羅への思いがふつふつと湧き上がってくる。沙羅を守りたいと思う気持ち。血が騒ぐような、吸血鬼^{ヴァンパイア}を狩った時のような感情…。

『血』それは俺たちの中に流れているもの。吸血鬼^{ヴァンパイア}にとっては生きる源だ。——俺はあいつ等を狩る側の者。吸血鬼^{ヴァンパイアハンター}を狩る者。それは古から受け継がれた存在。奴ら（ヴァンパイア）がいるからこそ、俺たちは在る。まるで対のような、正反対の人間と化け物。

口角を上げ、笑みを漏らす。

「……なんで人はそれぞれ、重い物を抱えて生まれてくるんだろうな……？」

歩いていた足を止め、顔を上げる。明冬が見上げた空には輝く満月と黒い雲が浮かんでいた。

第18章

小鳥のさえずりと共に沙羅は目を覚ました。

カーテンから微かにもれる一筋の光。顔に当たる光に沙羅は目を細め、まだ覚醒しない頭をはっきりさせる。

むくりと起き上がり、ベッドを出る。

机の上に置かれている時計を見た。今は、午前7…00時。学校へ行くまでたっぷり時間がある。ゆつくりとした動作で沙羅はパジャマから制服へと着替え、部屋の隅にある鏡の前に立ってリボンを正す。そして、クシを片手に髪を梳かす。そして歯磨きをする為、階段を降りていく。洗面所に向かう時、台所から朝食の良い匂いがし、沙羅の鼻をくすぐった。数分で歯磨きを終え、リビングに向かう。ドアを開けると、バターの匂いがする。その香りに沙羅は笑みを漏らす。一日の始まりだと沙羅は確信した。

学校に着き、沙羅はまだ返していないハンカチを返すため樹を探しに校内を歩いていた。

「こんな、朝から居るわけ無いよね…」

ポケットの中に在るハンカチをスカートの上からぎゅっと握る。掌に柔らかい布の感触を感じた。

沙羅が歩き回って30分が経った。いくつもの部屋や室内を探しても樹の姿は見えない。

——あと、行っていないのは…屋上だけ。不安と期待を胸に沙羅は屋上の階段を一段ずつ登っていく。沙羅は階段を登り終え、やっと屋上の扉の前に立った。自分が上がってきた階段を上から見下ろす。此処まで来るのに、長く時間が掛かったと沙羅は思った。———実際、そんなに時間は掛かっていないのだが。そして、恐る恐る———ドアノブに手を掛けた。

ガチャリと音を立てドアは開く。外の空気、風が沙羅の頬を撫でた。心地よい、風。沙羅は一步、屋上に足を踏み入れた。そこにはよく見知った人物――樹が、沙羅に顔を背向け、フェンスに寄りかかっていた。

そよそよと髪が揺れている。樹は何を見つめているのか。憂いに満ちた彼の横顔に沙羅はドキリとした。そして、樹が沙羅の方を向いた。ぼんやりとした樹の瞳。それは沙羅を見て次第にはっきりし、樹は驚いた表情になった。

こうやって樹を目の前にすると何を言えば良いのか分からなくなる。彼の瞳に囚われてしまったように…。

ボーっと樹に見惚れていた沙羅。樹が口を開き、ようやく沙羅は気が付いた。

「…なんで、此処に？」

答えない沙羅に樹は間をいれず、言う。

「俺に、関わるなどと言った筈だ――」

何も言わない沙羅に樹は眉を潜める。その鋭い目つきに沙羅は怯え、震えた声で告げる。

「……私、ハンカチ返しに來ただけ、だからっ……！」

スカートのポケットから黒いハンカチを出し、樹に渡す。

「…それ、だけ…だからっ……それと、あの時っ…は……ありがとうっ……」

震えた声で怯えた表情で沙羅は言い、樹を不愉快にさせないよう、早く屋上から出ようとドアノブに手を掛けようとした、その瞬間。樹が沙羅の腕を掴み、それを制した。

第19章

沙羅は予想せぬ事に驚いて振り返る。美しく歪められた端整な彼の顔。

どうして、そんな顔を見せるの？ さっき言った言葉は嘘かもしれない――と沙羅は考える。頭の中を甘い期待が支配する。

掴まれている腕が熱い。沙羅は掴まれている腕と樹を交互に見比べる。

「…ごめんっ……」

樹から発せられた身に覚えの無い言葉。その樹の一言に沙羅は困惑する。

何故、自分を引き止めるのか。彼の心理が分からない。樹の行動が嬉しくない訳ではないが…。自分を止めた理由が聴きたい。彼の口から全てを。

沙羅は足元に視線を落としたまま、黙っている。

「……っ…」

いきなり手首を強く握り締められ、沙羅は小さく悲鳴を上げた。

「……痛いっ！」

「…あ、ごめんっ……」

「……。」

何も喋らない沙羅を見て、樹は掴んでいた腕を放す。

「……。」

「……。」

二人は何も言わない。木々のざわめきだけが音を奏でた。長い沈黙が続き、沙羅が樹に背を向ける。そして、沙羅は樹を一瞥し屋上を去って行った。

彼女の居なくなった方を樹は何ともいえぬ表情で見つめていた。

「…らしくないな…」

ポツリと呟いた一言が青い空へと吸い込まれていった。

ギラギラと輝く燃え滾る太陽。降り注ぐそれに心と身が焦がされる。その光が心地よく感じた。いつもなら、直ぐに光を避け戻ってしまうのに。今は何故か太陽に包まれていたい。この感情はあの子からの罪悪感から来るものなのか。樹は手を握り締め、壁を叩く。見れば、己が叩いた壁は見事に凹み、先ほどまで白かったものの一部は粉々にされていた。

忌々しい自分の、人とはかけ離れている力。

「……くそっ！」

すつきりしない気持ち。あの子に対しての罪悪感。何度否定しても、沸き上がってくる思い。あの子の傷ついた顔を見ただけで胸が締め付けられる。あの時、腕を離したくないと思った。それに自分を分かって欲しいとまで思った。自ら彼女を避けたというのに、醜く、意地汚く、身勝手だ。

最後の最後まで彼女は、恐れて怯えてハンカチを返しに来た。彼女が返しにくるまで、自分はそんな布切れなんてとくに忘れていた。いや、彼女の事が頭を離れなかったからだ。

彼女が屋上に入って来たとき、自分でも頬が緩むのが分かった。酷い言葉を浴びせたと言うのに、それでも彼女が来てくれたという事実が、自分でも舞い上がるのを心の奥で感じた。その思いとは反対に信じたくないと言う自分。答えはもう喉のすぐそこまで来ているのに、それを中々口に出すことは出来ない。そんな自分がどうしようもなく、情けない。

彼女の怯えた顔、震えた手足、小さな声。最後に彼女が見せた、泣きそうな失望したような表情が脳裏に甦ってくる。彼女を抱きしめたくても、抱きしめられない。その全ての元凶は自分。何故、『関わるな』なんて言ったのだろう。今思えば、バカだった。

『関わるな』その一言が彼女を傷つけたのだ。傷つける為に言ったのではない。彼女を守る為に危険に晒されないように守る言葉だった。それが裏目に出るなんて。

後悔して分かった自分の気持ち。長年自分が経験していなかった

淡い恋心。ようやく樹は沙羅に対する感情が分かった。いつ、気付いたのかは分からない。そう思った瞬間から沙羅に対する苦しい思いは恋だと樹は知った。沙羅の魅力に惹かれる自分。――否もう、溺れてしまっているのかもしれない。

人間と吸血鬼ヴァンパイアはけっして共存出来ないと、人間を忌み嫌っていた自分が――人を、一人の人間に恋をするなんて、思ってもいなかった。

口元に笑みを浮かべ、空を見上げる。見上げた空にはサンサンと輝きを放つ、光の源が淡く強く、存在を示すように、樹の顔を照らしていた。

第20章

沙羅は廊下を歩いていった。肩を落とし、トボトボと教室に向かう。――結局、私は何も聞けなかった。ただ、ハンカチを渡しただけ。なにも聞けなかった、話せなかった。そんな自分に腹が立つ。そう思う反面、やはり怖気付いていた。好きな人に怖気づくなんてバカな話だ。好きなら、真っ直ぐに向き合えば良い。何かを確信したような瞳をして沙羅は背筋を伸ばし、一步、また一步と歩み始めた。

「ふあーあ」

大きいあくびが明冬の口からこぼれた。

「どうしたの？ 寝不足？」

彼のあくびを聞き、沙羅はお弁当を開けながら問う。そんな沙羅に本当のことを言えるはずも無く明冬は、疲れたよとだけ告げる。そんな二人の会話を隣で聞いていた蒼渥はパンを頬張りながら、言う。「…まあ、そんな事はどうでもいいけど。それより、6限の数学！ 当たるんだけどっ！ ヤバイよ。沙羅見せてね？」

上目遣いに擦り寄ってくる蒼渥を見て、沙羅は苦笑する。

「…はいはい」

「やったー♪ ありがとー沙羅！」

屈託の無い向日葵のような笑顔。おもわず自分も頬が緩む。そんな彼女を見て、悩みが無いんだなあとと思い羨ましくなる。手元にあるお弁当に目を落とし、玉子焼きを一切れ口に運ぶ。口の中に広がる優しい味。それを噛み締め、平らげる。全て食べ終わった頃には、昼休み終わりのチャイムが鳴っていた。

「…うわっ！ 早くいかねえとヤバイぞ！」

そう言って明冬は沙羅たちを急かし、歩き出す。

「ちょっ、早いってー！」

嘆きながら蒼渥は明冬の元へと急ぐ。沙羅は二人を微笑ましく見つ

めていたが、予鈴が鳴った事を思い出し、慌てて二人を追いかけた。急いで教室に戻ってきた頃には、皆ちゃんと次の授業の教科書を出している。先生はまだ来ていないみたいだ。なんとかセーフのようだ。安心して息を吐き出す。蒼湮や明冬の顔を見ると同じ事を考えていたようだ。そんな彼らに苦笑した。

沙羅は自分の席に座り、筆箱等を机に置く。何か、視線を感じ沙羅は隣の席の明冬を見る。見ると目が合った。

「？ なに？ 私の顔になんかついてる？」

不思議に思い首を傾げ問う。

「えっ？ …いやっ…別に」

「――そう？」

バツが悪そうに目を逸らす明冬。――何なんだろう。本人は何でもないって言っていたのだから、深い意味は無いのだろう。特に気にする事も無く沙羅は頬杖を付いた。

退屈すぎる授業が終わり、ホームルーム。皆、帰る準備や部活動の用意やらで教室がざわついている。それを担任の教師が宥め、明日の予定を言っていく。

「え〜。月曜は……」

長々とした話が終わり放課後。

明日は学校が休み。何しようかなあと考えていると、前からトコトコと蒼湮が歩いてきて、顔を覗き込んだ。

「沙羅あー！ 明日、暇？ 暇だったら、遊びに行かない？ ほら、最近バタバタしてたからさー」

沙羅は蒼湮の言葉に微笑む。

「…いいよ？ 何処行く？」

沙羅も年頃の女の子。断る理由も無いのですぐ蒼湮に答えた。そして、二人は自分達の家近く、分かれ道まで明日の予定や愚痴などを散々言い合い、それぞれ帰宅するため歩き出した。



沙羅はお風呂から上がり、パジャマを着ようと手を伸ばし、それを掴んだ。鏡に映ったパジャマ姿の自分。その鏡を見、ボタンに手を掛けた。沙羅はいつもとは違う、自分に気が付いた。紅い色。左胸の上に赤い痣のようなもの。それが浮かび上がっていた。何かのインクが肌に付いたのかと思い、指で擦るが取れない。何処かにぶつけたのだろーと思ひ、沙羅は何事も無かったように脱衣所を出た。

第21章

ベッドの端に足を抱え、だんだんと黄昏たそがれていく空を見上げていた。沙羅以外、誰も居ない部屋の中、時計の秒針の音がカチカチと時を刻んでいる。何をする事も無く、ただずっと窓の外を見つめている。動いていく雲。青い空を覆い隠すように雲は流れていく。

「はぁ……」

ため息を一つ吐いた。

「逢いたいなぁ…。久遠に…」

自分で言って、恥ずかしくなる。耳まで真っ赤になった顔を沙羅は自分の膝に埋める。逢いたいといっても、樹の電話番号やメールを教えてもらっていないので逢う事はできない。そして、また沙羅は息を吐く。その繰り返しだ。沙羅がどうしようかと悩んでいると、下から声上がる。

「沙羅ーあ！！ ちょっと来てー！」

母の声だ。何事だと思いリビングに行く洗濯物をたたんでいるお母さんの姿があった。

「どうしたの？」

「ちよっとね……この洗濯物たたんでいるうちに夕方になっちゃって。今、手が離せないし。それで、お願いだけど今日の夕飯のおかず買って来てくれない？」

コテンと首を傾げ言う母はなんだか可愛らしい。

「いいけど、何でもいいの？」

「ええ、じゃあ悪いけどお願いね？」

沙羅は詩織に言われ家を出た。家を出てみれば、夕陽が沈んでいた。その夕陽を眺めながら沙羅はスーパーへと急ぐ。

スーパーに着くと、そこは人で溢れていた。そういえば、今日は特売日だな。と思いながらカートの上にカゴを乗せ走らせる。

から揚げに、ポテトサラダ、の材料をカゴに入れる。他に切れた

ものを探していく。

「えーと、牛乳とドレッシング、コーヒーの粉、しょうゆ、こしよ
う、卵……小麦粉か」

お母さんから渡されたメモ帳を見て、沢山買うものがあるな〜と感
心していると、チョコレートやクッキー、ポテチなど色々なお菓子を
腕に抱えた女の子が目にとまった。前が見えていないのか足元は
ふらついている。危ないと思ったなら案の定、その子は転んだ。

「…！ きゃっ！」

沙羅は直ぐ少女の元へと急ぎ、少女を立たせた。

「大丈夫！？ …痛くない？」

と沙羅は問うが少女は目に涙を浮かべている。

「湊都？」

と少女を呼ぶ声がし沙羅は声のほうへと振り向く。

「樹お兄様っ！！」

少女は男の名前を言い駆けて行く。その男を見ると沙羅は目を丸く
した。

「…久遠？」

沙羅が樹を呼んでも気が付いていない。湊都から目を上げ樹は沙羅
を見つめた。

「！ あ……」

二人の視線は一瞬絡まるが、お互い気まずいのか同時に目を逸らし
た。

「……ごめんね？ 私、もう行くから」

沙羅は立ち上がり樹を見ないように樹に背を向け歩き出す。そんな
二人のやりとりを不思議に思ったのか、湊都は樹を不安をそうに見
上げる。

「…樹お兄様？」

「…なんでもない」

悲痛な顔をして沙羅を見ている兄。この二人の間になにかあったの
だろうと湊都は思う。

寂しく遠ざかっていく沙羅の後姿を見て、湊都は樹の手を離し沙羅を追いかけた。樹は突然の湊都の行動に驚き、手を掴もうとするが遅かった。自分の妹はすでに沙羅の元へと駆け出していた。

「…待って！ お姉ちゃんっ」

沙羅を呼び止めようと声を張り上げるが周りに居る買い物客のせいで声は掻き消されてしまう。湊都は人を掻き分けるようにして前に進む。そしてやっとのことで沙羅に追いついた湊都。沙羅の服を掴もうと手を伸ばしたがその手は沙羅の服を掴むことなく、空を掠めた。

「湊都っ！ 何をやっているんだ！ すぐ帰るぞ。こんなところでうろうろ歩き回るんじゃない」

自分の腕を見ると強い力で握られていて、どんなにもがいても離される事はなかった。

「お兄様っ！」

「…屋敷いえに戻るぞ」

兄の有無を言わさない態度に湊都は押し黙った。樹に連れられ屋敷に戻ってきた湊都は早速、さっき会った女、沙羅のことを兄から聞きだしていた。

「お兄様！ さっきの人は？ 誰なの？」

腕を組み、何も言わない樹。それでも湊都は折れずに問いかける。

「…知っている方なんでしょ？ 何かあったんじゃないの？」

「……」

「それに、あの人凄く、いい香りがしたわ…：：：思わず噛みたたく噛みたくなったと言おうとしたが樹の怒鳴り声にかき消された。

「言うな！ あの子に牙を向けたりしたら、俺が許さないから…：：冷たく言い放った樹に湊都は背筋を凍らせた。

第22章

これだけ、兄が怒鳴るということはそれだけあの人間が大切だということ。それに微かに香った薔薇の甘い薫り。湊都は人差し指をくわえ、犬歯で噛んだ。流れ落ちる血。舌で舐め取れば、甘い果実の味がする。喉を潤わす甘美な飲み物。

「…薔薇ねえ。調べる価値はいくらもありそう……」
零れ落ちる血を舐めとり、湊都はニヤリと微笑んだ。湊都の頭の中には先ほど会った女の事しか浮かんでいなかった。

くしゃりと前髪に指を絡め、ため息を吐く。

「…まさか会うなんて」

瞼を閉じてみれば脳裏に甦ってくる彼女の匂い、声、温かさ――。会っただけなのに抱きしめたいと思った。自分の腕に彼女の小さい体を閉じ込め、何処にも行けない様に自分という鎖に繋いでしまいたい。そう思うのは狂っているだろうか？ ただ一人の人間にこんな感情を持ったのは初めてだ。けれど、所詮自分は吸血鬼^{ヴァンパイア}。そして彼女は人間。相容れぬ仲なのだ。

「…湊都は興味を持ったか」

また一つ。樹はため息を吐いた。妹に知られたという思いと、自分だけが知っていたのに彼女を他人に知られてしまったという思いが入り混じり出たものだった。樹はふと沙羅を思い浮かべ思った。自分はこのなに独占力が強かったかと。否、沙羅に出会ってからだと確信する。そして沙羅に溺れてしまっている自分がいる事を樹は知った。

「…悪化してる」

沙羅は鏡に映っている己を見てポツリと呟いた。

淡い色をした薔薇の蕾。一週間前まではこんな痣ではなかったと沙羅は左胸を見た。一週間前は、蚊に刺されたような痣だったが今は、大きくなり今にでも蕾を開こうとしている。痣が形を変えるなんてことは在り得るのだろうか。そんな話、一度も聞いた事が無い。でも、実際なってしまうているのだからどうしようもない。

痣を一瞥し、不安に駆られた。この体は自分のものでは無いのではないかと。 ”薔薇姫” に関連している事なら尚更だ。

「…どうして、私なのっ」

下唇を噛み、苦しみを耐える沙羅。なぜ、自分なのかと自分自身に問う。嘆いても仕方が無いのに。

この世に生を受けたそのときから人は、己でも変えられない運命を背負って歩んでいるのだ。幸せも不幸も色んな出会いも全て運命で始まっている。変えられないものだからこそ、歯を食いしばり我慢するのだ。そうやって何度も沙羅は頑張ってきた。しかし、沙羅も人間、限界と言うものがある。強い心もこればかりは折れてしまった。

「…久遠っ」

沙羅は愛しい人の名前を呼ぶ。彼を思い出すことで苦しみが薄れると思ったがそんな事は無かった。ただ虚しい思いと寂しさが込み上げて来ただけだった。それが涙となり、沙羅は床に膝をつく。両手で顔を覆い、溢れる涙を押さえた。けれど、止まる事の無い水は頬を伝い震える体をより冷たくした。湯冷めした沙羅は自分自身を抱きしめ脱衣所を出た。

いつもなら水を一杯飲みにもリビングに行くのだが、今日はそんな気になれなかった。泣き顔を見られなくなかった。沙羅はバスタオルを持ち、部屋へと続く階段を上がった。

電気もつけずに沙羅はベッドへと横になった。窓から漏れてくる月明かりが沙羅の顔を優しく照らす。泣き止んだ沙羅は体を起こし、三日月を見上げた。――月が笑ってるみたい。

窓を開け、また月を見る。空を見るのも月を見るのも、沙羅は好きだ。静かで心が落ち着くから。嫌な事を忘れる事が出来るから。だんだん月を見ているうちに瞼も下がり始めてきた。このままじゃ風邪をひくと思い、沙羅は窓を閉め布団に入る。泣いたからかすぐに眠りの中へと沙羅は落ちて行った。

第23章

さわさわと風が髪を撫でていく。

青い空の下、の屋上、沙羅はお弁当を広げ、から揚げを頬張っていた。

屋上には沙羅以外誰も居ない。

「…はあ。ホント気持ちいいな」

お弁当を平らげ、沙羅は誰も居ないのを良い事にゴロリと転がった。その姿を見られているとも知らずに。

「…マイペースというか、何というか。のん気だな」

頭上から聞こえた声に沙羅は目を上げ、起き上がる。

「——っ！ 久遠っ」

予想もしていなかった相手に叫ぶ。

樹は口に弧を描き、沙羅の隣に腰を下ろした。

「…元気だな。相変わらず」

「……。」

身を硬くした沙羅に樹は笑い、告げる。

「——そんなに固まるなよ。いくら俺で無くても傷つく…」

樹の切なくなった横顔に沙羅は慌て言う。

「ちがっ…そんなんじゃないかって私は…その、」

何を言っただいかわからず、しどろもどろになる沙羅。そんな沙羅を見て樹は目を伏せ言葉を紡ぐ。

「ごめん。もう二度とあんな事を言わない。約束する……。許してくれなくても構わない。謝れというなら、土下座でも何でもする。

——それで気が済むのなら」

「……許さない」

静かに、けれどはっきりと告げた沙羅に樹は戸惑いを隠せず、顔を上げた。

「…ご、ごめん。俺が悪かった。だから——」

「……。」

必死に頭を下げ沙羅に許しを請う。そんな彼に気付かれないよう小さく笑む。

「…許さないけど、二度と言わないのなら良いよ？ ……傷ついたんだから。そのお返し」

カラっとした声音で告げると彼は安堵したようにほっとため息を漏した。

「久遠はいつも屋上に来ているの？」

ふっと疑問に思ったことを告げると、そうだと答えられ納得した。

「…なあ」

「ん？ 何？」

振り向いて、驚いた。以外に彼と近い距離におもわず声が出そうだった。

「…そのさ、”久遠”じゃなくて名前で呼んでよ、沙羅」

苗字でなく名前で読んで欲しいと。

「…えっ。でも…久遠って呼ぶの、慣れ…てる、から」

同じ年代の男子にそんな事を言われるのは沙羅は初めてで、どう接していけば良いのか分からず、ただ顔を逸らす。

「…呼んで、沙羅」

耳元で囁かれ背筋がぞくつとする。

「っ……いつきっ」

沙羅は小さな声でポツリと呟く。が、

「聞こえない…今度は俺に聞こえる声で」

顔を紅く染め樹を睨む。でも、それは樹を煽るというだけ。

「…意地悪っ……」

沙羅は意を決めたのか、少し顔を上げ樹を自分の瞳に映した。その動作に樹は戸惑い、沙羅を見つめる。

樹と沙羅、二人の間に沈黙が流れる。沙羅は息を吸い樹の名を口に出した。

「――樹」

言って恥ずかしくなったのか、沙羅はふいと目を泳がした。横目で樹を見ると目が合い、沙羅は彼の耳が赤くなっているのを見て、恥ずかしいのは自分だけじゃない事を知った。

「……えっと、」

「っ何も言うなよ？ それとこっち見るなっ」

そんな事を言われても、見てしまったのだから仕方ない。それでも、気になり沙羅は樹を見た。そして樹もこちらを伺っていたらしく、また目が合った。

「ぷ、あはは！」

「ふっ、ははは！」

二人は一斉に笑い出す。恥ずかしいのを通り越して笑みが零れる。

「…ま、まさか一緒に事してたなんて、」

「ああ…そうだな。こんなに笑ったのなんて久しぶりだ」

懐かしむような目をして遠くを見つめる樹。同感というように沙羅は言った。

「私も」

沙羅の発した言葉に対し樹は不思議そうに沙羅を見る。

「どうしてだ？ お前なら家でも笑っていきそうなのに…」

そう言っ樹は気付いた。彼女の頬を伝う雫を。

樹は黙ったまま人差し指で涙をすくう。

「ごめんっ…なんでもないから」

涙を手でぬぐい、顔を樹から逸らした。

「…無理して笑わなくていい。泣きたい時は泣けばいい」

そう言っ樹は沙羅を抱きしめた。

何も問わない樹に酷く安心し、沙羅は静かに頬を濡らした。

第24章

抱き締められ彼の温もりが伝わってくる。ぼんやりとした頭で沙羅は吸血鬼ヴァンパイアも人と同じように暖かいんだと思っていた。

「…ありがと。なんか、すっきりしたっ！」

そう言っただけで沙羅は屈託無い笑顔を見せた。樹も同じく笑みを返し、再度同じように沙羅の顔に触れた。

「…目え、赤くなってる。後でちゃんと冷やしとけよ？」

樹は手を伸ばし、沙羅の赤く腫れている目をそつと撫でた。

「…っ…うん」

頷いた沙羅を見て満足そうに樹は微笑んだ。微笑んだ樹に対し沙羅はまた俯うつむく。そして、そのまま樹に問う。

「…聞いて良いのか分からないんだけどさ、」

まあ聞くんだけどねと笑い、沙羅は樹を真っ直ぐ見、問いた。

「――吸血鬼ヴァンパイアって何なの？ それに薔薇姫って何？ 極上の血だとか、香りとか、もう聞くのはいやなのっ…。久遠なら、…樹なら知ってるんでしょ？ 教えてよっ…。」

沙羅の最も気になってる事。彼ならわかるとおもしろい質問を投げた。

「…沙羅は吸血鬼ヴァンパイア、俺たちをどう思う？」

静かな彼の声に耳を傾ける。

「……。」

黙ったままの沙羅を見て樹は何も言わず、そのまま話し続ける。

「――恐ろしい、怖いと思うならそれで良い。俺たちは人の生き血を啜る化け物だから」

『化け物』という言葉に胸が苦しくなる。彼にそんな言葉を言わせたいわけじゃない。沙羅はただ本当の真実を知りたいだけ。どうして、両親は”薔薇姫”というものを隠すのか。まだ知りたいことや疑問は沢山ある。

「…かじゃ…ない」

「え？」

「……化け物なんか：ないっ！ 樹は化け物なんかじゃないっ！
違う：違うの、そんな事を言わせたいんじゃないっ。私はただ……」
そう言って沙羅は自分の体を抱きしめる。震える体を、己の腕で。

「：吸血鬼は怖いよ。怖いけど、私はそれを受け止める。だって生きて
いるから。私達とそんなに変わらないよ。人間も牛や鳥の肉を
食べているでしょ？ だから同じ」

真っ直ぐ樹の瞳を見て呟いた。

「：だから、そんな事を樹に言って欲しくない」

「——ホント沙羅には敵わないよ」

樹は優しく沙羅の頭を撫で、ゆるりと頬に手を這わした。

「もう質問は？ 無い？」

「：あるけど：薔薇姫って知ってる？」

極上の血を持つ者。一口啜れば、もう他の者の血は飲めないという。
難題でも押し付けられたように樹は一瞬、眉を寄せた。その表情
を沙羅が見逃すはずも無く、沙羅は首を傾げた。

「樹？」

「：薔薇姫は2千年に一人生まれてくる女兒。その血は甘く、口に
した者は最高の快樂と力が得られると俺達の間（ヴァンパイア界）
では言われている。そして、その血を求める輩も少くない」

”その血を求める輩も少くない” 沙羅は樹の言った事を心の中
で繰り返した。

「輩って：もしかして」

青ざめる沙羅を見て樹は頷いた。

「そう。吸血鬼だ：薔薇姫になった奴は最悪だな。こんな卑劣で傲
慢なものに狙われるなんて：俺だったら自分の運命を恨む。もしくは
は両親か：でも、2千年なんだ。そんな確率で生まれてくる、人間
なんていないさ」

（薔薇姫が目の前にいる私だったら？ 貴方はどうするの？）
震える掌をもう片方の手で強く抑え、止める。

胸が苦しい。息が出来ない。耳鳴りがする。話している時の樹は哀れんだ顔だった。自分を、薔薇姫を可哀想だと樹は言った。言っていないが、そう聞こえた。

「…じゃあ、もしも私が薔薇姫…だったら？　樹はどうする？」
恐る恐る沙羅は訊ねた。

「沙羅が？　…そんなのあるわけ無い。もし、沙羅が薔薇姫なら俺は絶対に、何が何でも沙羅を守ってみせるよ」

真剣に、ただ真剣に樹は沙羅に向かって言った。曇りない澄んだ瞳で沙羅を映し、樹は告げた。

涙が零れ落ちそうだった。言葉をくれるだけでこんなにも不安が溶けて行く。そんな気持ちからか、沙羅は一粒、雫を流した。その水が沙羅の手の甲に落ちた。

「…沙羅っ？」

樹は沙羅が泣き出してしまったかと思い慌てて彼女の顔を覗き込んだ。

「…樹、ありがとう」

心からの笑顔でありたけの思いを込めて沙羅は微笑んだ。

第25章

肌にまとわり付くねっとりとした風が沙羅の頬を撫でた。季節はもう夏。といっても梅雨だが。暑さに弱い沙羅は机の上でぐったりと顔を伏せていた。

「沙羅。大丈夫？」

蒼渥の問いかけに唸るようにして答える。

「うー熱い…」

「だよね。うっとうしいぐらいに…早く夏になれば良いのに、なんで梅雨なんてあるんだろうね」

うんうんと納得するように首を縦に振る明冬。

「俺も同感。この暑さにだけは俺も無理」

明冬は制服のネクタイを緩め、下敷きで仰ぎ始める。

「次、体育だよ？ この熱気の中やれっての？ それに100m走だし、日焼けするじゃない。最悪」

机に肘を突き蒼渥は顔を顰める。

「え？ 次、体育だっけ？」と体を起こし沙羅はダルそうに蒼渥を見た。

むすっとした顔で答えた蒼渥。

「うん。そうだよ」

感情の籠っていない声で告げられ、苦笑する。

「そんなに体育嫌い？」

「うん、大っ嫌い。英語の次にね」

蒼渥の言葉と共にぽつぽつと雨が降り出してきた。空を見上げると灰色に薄暗く染まっている。

「うわー。こりゃ駄目だね、体育なしだ！」

と、蒼渥が喜んでいた矢先に生徒指導の森田先生がドアを開けて教室へと入って来た。皆、何事かと友達と顔を見合わせたり、互いに何か言い在っている。

「次の体育は、体育館で行う。それと、男子はそのまま保健：以上、女子は着替えておくように」

大声で森田先生は言うとそのまま出て行ってしまった。

「なんだゝ結局あるじゃん」

肩を下げ落ち込む蒼渥。

「まあ外じゃないし良かったじゃん」

すかさず励ます明冬。

二人の会話を肘を突きながら聞きながら、嫌そうに沙羅は雨雲を眺めていた。

体育が終わり更衣室で着替えていたとき、蒼渥が胸もとに何かを見つけ聞いてきた。

「あれ？ 沙羅、こんな所に刺青してたの？」

「え？」

まさかと思い見てみると一ヶ月前に見たものの形が大きく変わっていた。

「可愛いね、それなんか薔薇みたいで素敵だなあ」

「……っ。」

この痣は可愛いってものじゃない。自分自身を締め付ける、吸血鬼ヴァンパイアに居所を示す刻印のようなもの。それが可愛いなんて。

「沙羅？ どうしたの？ 顔色悪いけど…大丈夫？」

蒼渥は覗き込み、心配そうな顔をする。

「…大丈夫」

そう呟くと彼女は安堵した表情になり、保健室にいく？ と問いかけてきた。沙羅は蒼渥の誘いをやんわりと断り、変わりにありがとうと告げた。

二人は更衣室を出て、そのまま廊下を歩いていると一人の男子と沙羅はすれ違った。高宮架斐だ。彼の姿を見て沙羅は身構えたが、本人は何もせず踵を返し人ごみの中へと消えていった。

「何なの…？」

架斐が居なくなった方向をずっと眺めていたが、蒼湊の声で我に返り沙羅は目を上げた。

「沙羅ってば！ 聞いてる？」

「え？ あ、うん：何？」

乾いた笑みを浮かべ蒼湊を見れば、頬を膨らましぶつぶつ文句を言っていた。

教室に戻り、下敷きで仰いでいると明冬の悲痛な叫び声が聞こえ、沙羅と蒼湊は二人して耳を塞いだ。「何ー？ うるさいよ、明冬！」

「騒がないといれないんだよ！ 小テストの点数、お前ら何点だった！？」

鬼のような顔をして肩を揺らす明冬に迷惑そうに沙羅は顔をしかめる。

「85点」

「私は86点だよー明冬は？ 何点だったの？」と蒼湊。

「なんでそんなに良い点数なんだよっ、俺なんか：63点だぞ！」

「ヤバイって！ 母さんに殴られる」

明冬が殴られる所を想像して、噴出してしまい、怒られてしまう。叩かれた頭をさすり、沙羅は窓に付いている水滴を見た。

今も雨は降り続けている。シトシトと。これだけ振り続ければ、もう太陽は出て来ないんじゃないかと思ってしまう。沙羅は今も尚、葉っぱや木を濡らし続ける雨に眉を寄せこう呟いた。

「ホント：嫌だなあ」

その一言は誰にも聞き取られず、静かに雨の音と混じっていった。

学校の帰り道、道端に黒い傘を差した女の子が一人たたずんでいた。その子は誰かを待っているらしく、歩き去っていく人の顔を見つめては俯き、それを繰り返していた。そして、その子と目が合ってしまった沙羅はドキッとした。その女の子は樹の妹であったからだ。

「あ！ あの時のお姉ちゃんっ！」

目が合うと直ぐにニコリと笑い、傍に駆け寄ってきた。

「えっと…湊都ちゃんだったよね？」

「うん！ あ、えっと…久遠湊都9歳です。この前はちゃんと挨拶できなくてごめんなさい」

申し訳なさそうに誤る湊都に沙羅は関心する。

「私は水無月沙羅、よろしくね。それより…湊都ちゃんはどのようにして此処に？ いつき…お兄ちゃんを待っているの？」

「ううん。お姉ちゃんを待っていたの」

「わ、私を…？ どうして？」

「だって——」

湊都の声を遮るようにその声は聞こえた。

「——ああ、じゃあなっ！」

彼だとわかり心臓が波打ったような気がした。振り向こうとした瞬間、沙羅は何か腕を強く掴まれバランスを崩した。掴まれた腕を見ると小さな湊都の手がそこにあった。

「…湊都ちゃん？」

沙羅の問いに湊都はハツとなり、おずおずと手を離れた。腕にはくつきりと赤く痣になっていた。少し血も滲んでいる。

「ごめんなさい、あたしこんなことするつもりじゃ…」

湊都は持っていたカバンから絆創膏を取り出し、沙羅の腕に張ろうとしたが、何かに魅入られたかのように動かなくなった。湊都の眼に映った赤い雫。そこから薫る甘美な香り。湊都は沙羅の腕から目を逸らす事は出来なくなっていた。

「…どうしたの？ 湊都ちゃ…っ!？」

顔を上げるなり、いきなり飛びついてきた湊都に驚き沙羅は傘を放す。傘を放してしまえば体は冷たいアスファルトへ叩きつけられた。その衝撃で咳き込んでしまう。

「ごほっ、こほ…っ!」

息を正そうとしていると首を締め付けられ、息が吸えなくなる。湊都の腕を放そうと、もがくが一向に放してくれない。

「はあっ…はあっ…血、」

これは正気の沙汰ではない。

「…湊都ちゃんっ！ 目を、覚まして、貴方は…はっ！…こんな、事する、子じゃ、ない…っ」

呼びかけても、返事を返してくれない。ただ、湊都は血を求める獣と化したのだ。沙羅の声が聞こえず、血、血と叫ぶ。その姿はまさに異形な化け物。何かに取り付かれたように激しく牙をむき出す。狂犬とでもいうべきか。子供だからか自身を押さえ込めないらしい。血ということだけに体が動いている。

「…だれかつ！ たすけて…」

押さえることに力尽きたか、沙羅は抵抗を弱め、意識を飛ばそうとしていた。が、間一髪といったところで沙羅は誰かに助けられた。目が霞みよく見えない。

「…だれ？」

か細い声で訊ねた。その声は聞こえていなかったらしく、相手は無言だった。けれど、抱きかかえられた時の温もりが暖かくて、心地良くて、疲れからかそのまま沙羅は寝てしまった。

「余りに、無防備だ…沙羅」

優しく頬を撫でてやると沙羅はくすぐったそうに身を寄せた。

「湊都…正気に戻ったか？」

しばらく沙羅を見ていたが樹は湊都に視線を移した。

「——はい。申し訳ありません…樹お兄様」

許しを請うように告げるが樹の瞳は冷たいまま。

「…もう、二度と俺とお祖父様の許可なしで屋敷を出るな」

カチカチと音を成しているのはきつと湊都だろう。

「…ごめんなさいっ！ もうしないっ！ お願い、だから——」

「わかった、だから泣くな…：久遠の家の者が恥ずかしい。俺は怒らないから…」

沙羅を抱いているからか、樹は普段よりも穏やかで優しくかった。湊都は心からお礼を、言った。

樹は沙羅を家まで送り、寝ている沙羅を起こさないようにベッドへとそっと降ろし、布団をかけてやった。ずっと寝顔を見つめていたと思ったが、沙羅にばれてしまうと思い立ち去ろうとした、けれど「…樹」という彼女の声を聞き立ち止まった。

——起きたか？ と恐る恐る振り向いてみるとどうやら、夢を見ているようだ。規則正しい寝息を立てている。

「…寝言か。でも、嬉しいよ、沙羅」

寝言に安心し樹は笑みを浮かべ、指で沙羅の前髪を払い、そっと額にキスを一つ落とす。

「……おやすみ、沙羅」

ゆっくりとした動作で窓に近づき樹は黒い蝶となり羽を羽ばたかせ夜の闇へと還っていった。

第26章

夢を見ていた。とても、静かな夢を。

その夢の中で沙羅は優しく耳元で囁きられ、頬を撫でられるそんな夢を見た。撫でていた手はどこかへと消え、温もりだけが残り、沙羅ははっと目を覚ました。

目尻には涙。悲しかったのだろうか。でも、ぼんやりと夢の内容を覚えている。はっきりとはしないが、夢の中で安心していた自分が居たことを頭の隅で覚えていた。

「…ふあゝあ」

体を起こし、伸びをする。

ベッドから這い出てカーテンを開ける。カーテンを引いた景色はどんよりと淀^{よど}みしとすると雨が降っていた。雨の水滴が音を立て窓ガラスにあたっては落^{なか}ちている。

今日も雨かと心の内で毒吐きながら、歯磨きをする為、洗面所に向かう。そこに来れば、先客が居て、一生懸命自分の寝癖をくしで梳かしている柚鶴が居て可笑しくてつい、笑ってしまった。

「あははっ！ 私が直してあげようか？」と言えは、

「いい、自分でやる」ブスっとした顔で鏡を見ている柚鶴。

そんな光景が可笑しくて、また噴出してしまう。

「…笑わないでよ。折角、直しているのに」

「はいはい…。歯磨きが終わったら、私は退散しますよー」

歯ブラシを口に咥え、シャカシャカと歯を磨いていく。

あっ、と思い出したように髪を梳かすのを止め、柚鶴は聞く。

「そういえばさ、姉ちゃん昨日の男の人誰？」

沙羅は瞬きを2、3度した。

「…え？ 男の人？」

「うん。えーっと…姉ちゃんと同じ学校の制服で、確か名前は、ぎおん？ くおん？ って言ってたけど、まさか、姉ちゃんの彼氏？」

茶化すように問いかけてくる柚鶴に沙羅は聞き直す。

「違うから、えっ？ 久遠がどうかしたの？」

「…姉ちゃん、覚えてないの？ その、久遠って人、姉ちゃんを担いでまで家に送りに着たんだよ？ 姉ちゃんが貧血で倒れたって言って。あの時はすごいお母さん取り乱して、ほんと大変だったね…」
柚鶴が話すことに驚きを隠せずに、ただ黙って頭の神経を働かせていた。

（…私が貧血で倒れた？ いつ？ どこで？ 昨日の帰りは…）
ここで思い出した。樹に助けられたんだと。沙羅の脳裏に湊都との間に有った事を思い出す。そういえば、あの時の傷も残っているのだろうか？ と思い、沙羅は左腕の袖を捲^まくる。そこには丁寧に包帯が巻かれ、昨日の出来事の内容を主張していた。

話の内容を伝えてくれた弟にありがとうと、早口で言い、洗面所を飛び出した。

部屋に戻り、早々と制服に着替え、ドタドタと階段を下りリビングに向かった。急いで、テーブルの上に焼きあがっているトーストを片手に持ち、口にくわえる。焼き目の付いたパンの香ばしい匂いが食欲をそそる。

「…？ どうしたの沙羅？ そんなに慌てて…行儀悪いわよ」
騒がしくやって来た沙羅に詩織は怒鳴る。

「あっそうだ、沙羅。昨日久遠くんだったけ？ あの子、あんたを送り届けてくれたのよ？ ちゃんとお礼しときなさいよ。あ、それなら。」また倒れたら心配なので毎日、一緒に登校させてもらいます”って言ってたわよ？ あなたの彼」

ウフフと母の意味ありげな笑いに食べ物詰まらせる沙羅。

「ごほっ！ こほ…嘘！ 早く言ってよお母さん！ 変じゃないよね？」

バタバタと動き回る沙羅を何とか宥^{なだ}め、詩織はため息を吐く。

「大丈夫、いつもどうりよ。…あら、あれ久遠くんじゃないの？」
リビングにある窓を覗き見ると、玄関先に黒い傘が見えた。

「ちよっ…いくらなんでも、早いでしょっ」

湧き上がる衝動をなんとか押さえ込み、家を出る。玄関を出て直ぐ、黒い物が目に入った。黒い傘だ。湊都が持っていた傘と同じ色。

「くおん…？」

彼を呼べば、彼は傘をずらし振り返った。

「おはよ、沙羅」

沙羅と呼ばれ、自分も樹と呼んでいた事にいまさら気づく。

ドキドキと高鳴った胸を制服の上から掴み、落ち着かせる。彼に近づくたびに鼓動はどくどくと心拍数を上げてゆく。

彼の隣に着くまでの間の距離がとても長く沙羅には感じた。そうして、沙羅は樹の側へと歩み寄る。

「お、おはよ…樹」

彼を見上げれば、目が合い照れたように頭をかく。

「じゃ、行くか、」

「…うん」

そう声を掛けられ、沙羅は身を硬くする。

暫く二人で沈黙したまま、黙っていると樹が沙羅に話しかけた。

「ごめんな、うちの妹が…迷惑掛けて」

突然話を振られ、声が裏返る。

「う、ううんっ…ぜんぜん。大丈夫！」

「…そうか？ 腕とか、痛くないか？」

樹の目は沙羅の左腕に向けられている。

「平気、平気！！ 樹が包帯をしてくれたし…」

そう答え、笑みを見せる。何も言わず樹は沙羅の顔をじっと見つめていた。そして、沙羅の腕をそっと持ち上げ、包帯を解いた。あらわになった擦り傷、瘡蓋にはなっていないが膿んでいて痛々しい。

「…まだ、痛むだろ？」

と、彼は腕を掴んでいない片方の手で傷口を指でつつとなぞる。

「…っ…！」

弱くなぞられただけでも痛い。沙羅は顔を歪め、樹の腕を解こうと

する。

「放しっ…」

「傷の痛みを取るだけだから…」

樹は腕に顔を近づけ、口付けを落す。その事に驚き、沙羅は頬を真っ赤に染める。

そつと顔を上げ、目の前に居る彼女に言葉を投げる。

「痛みは？」

「…ない、けど…どうして？」

沙羅は失った痛みに困惑する。

ヴァンパイア

「吸血鬼の能力の一つ。治癒力だ」

「治癒力？　こんなのを治すって事？」

腕を上げ彼に見せる。

「ああ…そうだ」

「ふうん、他にも有るの？」

目をキラキラさせ、聴いてくる沙羅に樹は声を出して笑う。

「沙羅は、本当に見てて飽きない」

「何が？　私はこれが素なんですけど」

あっけらかんとして言う彼女を横に樹は傘を閉じた。

「あ…。雨、上がったみたいだね」

彼の閉じた傘を見て、沙羅も傘をたたむ。

雨雲もどこかへ流れ行き、日光が顔を出す。その光に沙羅は目を細め、気持ち良さそうに空を仰ぐ。空を見ていた沙羅の視線は樹へと移り、彼女は告げた。

「あ、そういうば…樹が背負って着てくれたんだっけ？　ありがとう」

沙羅の瞳に樹が映る。

「…え？　ああ、良いよ。そんなの——」

「それと、包帯もありがとう」

そう言ってから、沙羅は考えるようにうーんと唸った。

「痛みも取ってくれて有難う…数え切れないぐらい、私は何度も樹

に助けられているね」

沙羅は彼に優しく言い、頬笑んだ。

「…違う」

小さく樹は呟いた。

「違う、俺が沙羅に助けられているんだ。人間と俺達は違うのに、沙羅は分別しないで真っ直ぐに俺を受け止めるから…それが嬉しくて、いつも泣きそうになるんだ。それに沙羅が他の奴に奪われるのがどうしようもなく怖い」

今にも涙が零れ落ちそうな樹の表情。いったい何が彼を縛り付けているというのか。

「…樹？」

樹の頬に手を伸ばし、ゆっくり触れた。彼が今にも消えてしまいそうで怖かった。樹に触れるとちゃんと鼓動が伝わりため息を吐く。生きている事を表しているそれに安堵し、沙羅は樹から手を離す。けれど、樹はその手を掴み、沙羅の体を抱き寄せた。

「誰にも渡したくない。好きだ、沙羅」

沙羅の耳元で囁き、耳たぶを甘い噛みする。沙羅は感じたことの無い甘い痛みを漏らす。

「…あつ」

引き寄せた沙羅の体は柔らかく、力を込めれば折れてしまいそうなほど脆いと樹は思う。それは人と獣だからか。定かではない。

腕の中で身をよじる沙羅は苦しそうで、少し力を緩めた。

樹を見上げれば、感情が読み取れない。力をいれ、押そうとするがびくともしない。いつ離してくれるのか。沙羅は見当がつかない。再度、胸元へ伸ばした腕はいとも簡単に彼に囚われ、抵抗が出来なくなる。

必死に伝えようと紡いだものは掠れ、沙羅は涙を一筋流した。嫌だからではない。体と頭がついていかない。行為を止めて頭を整理したいのに、それも彼は許してはくれない。

沙羅に熱っぽい瞳で見つめられ、零れた涙を舐め取り樹は沙羅に

キスを一つ落す。

時折漏れる甘い吐息が樹の耳元を掠める。沙羅は身をよじり小さな抵抗を見せるが樹には何の効果も無い。ただ彼自身を煽るだけ。

「…っん…ふぁ」

最初より、激しくなった口内の愛撫に沙羅はギュッと目を瞑り、樹にすがり付く。

樹の見た目よりたくましい男の体に沙羅の胸は高鳴る。沙羅は力を失くし立てるのもやっとな状態だった。そして、名残惜しく樹は唇を離し沙羅を見た。

息を整え、沙羅は問いを投げかける。

「——それ本当なの？ 私を好きだって…」

「嘘じゃない。沙羅だから、好きになったんだ」

今度はちゃんと、沙羅の瞳を真っ直ぐ見て言葉を伝えた。

「でも、私…」

「答えられないなら、それで良い。俺は」

樹が間を入れたところで、沙羅は続ける。

「そんなんじゃない！ 嬉しいのっ。ただ、頭が付いていってなくて…。一日、考えさせて？ 私、まだ」

混乱している頭の中を出来るだけ整理したい。

「——わかった。

明日も、迎えに行く。沙羅に何かあったら俺が不安になるから。

じゃあ、俺は先に行く。沙羅も遅れないで…」

背を向け去っていく樹の後ろ姿をいつまでも沙羅は目で追っていた。

「なんでっ、あの子なのよ！ …なんで、あたしじゃないの？ 樹…」

沙羅と樹のやり取りを影で見つめていた一人の少女。怒りをあらわにし、射るように沙羅を見る。それに気付かず歩いていく沙羅。自分とは違い、幸せそうな顔をしている。彼女のその顔を見た瞬間、怒りが腹の底から湧き上がってきた。

「許さない…。あたしから、樹を取った罰、絶対後悔させてやる…」

そんな言葉を残し、少女は蝶となり羽ばたいた。

まさか、告白をされるなんて沙羅は思っても居なかった。歩きながらそんなことを考える。樹に一日、時間をくれと言ったが、あれは単なる沙羅の恥ずかしさからで、直ぐに好きと言える勇氣もなく、明日までという期限をつけてしまった。

はぁ。とため息を一つ吐き、喜びに震える胸を押さえ、玄関を訪れる。

「あ、沙羅ちゃん。久しぶりだね」

ふいっと隣を見れば、沙羅は背筋を凍らせた。

「高宮架斐…」

沙羅がそう言えば、架斐はおどけた様に牙を見せる。それは、沙羅に怖がれとでも言っているように。

「あれ？ アイツは一緒じゃないの？」

好都合だ、と思っっているのか架斐はじりじりと沙羅に近寄って行く。怖がる様も見せない沙羅に苛立ちを感じる架斐。その感情ともう一つ感情が生まれる。怖がらずに居る沙羅をめちゃくちゃに壊したいと思う気持ち。

「…ちっ」

何故、人間如きにそう思う？ 目の前に居る女は餌なのに、何故。

首をぎりぎりとはめば、苦しさに歪むその顔。しかし、沙羅は声さえ漏らさない。その事に苛立ち、素早く腕を離す。

首を絞められ、朝から色んなことが起きる一日だと沙羅は思う。場違いな思いだとしても、そう思ってしまう。

「げほっ、ごほ」

胸を押さえ咳き込む沙羅。そのまま、沙羅の髪を指に絡め顔を持ち上げる。

「すごく、そそるね。その顔、まるで俺に血を吸われている獲物おんなの様だ」

「っ…離してっ！ わ、私は貴方の獲物じゃないっ」

沙羅達、人間は獲物じゃない。ましてや、同じ形をしている獣に食われるなんて真っ平だ。それが架斐であるなら尚更だ。なおさら

「沙羅ちゃん、それは間違ってるよ？ 君達は皆、俺たちの食料だよ。なんなら…、その白い首筋に証明してあげようか？」

首筋をねっとりとしたもので舐められ、逃れようとする。抵抗しようにも出来ない。耳にかかる吐息がぞわりと体を駆け上がり、沙羅は身を震わす。

「…き、いつきつ、助けっ…いつき」

そこに居ない人の名前を呼ぶ。

「はあ。…沙羅ちゃんはアイツばっかだね。——ねえ、俺の名前も呼んでよ」

妖しく口角を上げる。けれど、沙羅は”樹”と叫ぶばかり。

「なんで、俺じゃないんだよっ。なんで…」

切なさで悲しさが入り混じった自分の声に架斐はハツとする。そして、すぐさま沙羅を離し彼女を一瞥する。

一瞬、何をされたのか分からなかったが、離されたのを良いことに沙羅は踵を返し、教室へと駆けて行く。その場に残された架斐は立ち尽くしていた。己の手のひらを見つめ、先ほどあった沙羅の感触を思い出し、嘲笑う架斐。

「はっ、この俺が…人間如きに、落ちるなんて」
くしゃりと前髪を掴み、思いに浸る。

一人の人間の少女が心に入り込み離れない。でも、沙羅は架斐では無い男を求め助けを請う。それが今、どうしようもなく悔しい。

ヴァンパイア

架斐は樹と同じ吸血鬼なのに何が違うのか。途方に暮れ、架斐は沙羅が去っていった方とは反対に歩み始めた。

第27章

階段を駆け上がり、後ろを見やる。どうやら架斐は追って来なかったらしい。ホッとしてため息を吐く。今日は一気に事が起こりすぎだ。二度有ることは三度あるというし、まだ何か起きるのだろうか？ そんな不安を心の奥に押し込め、教室のドアを開く。中を見渡せば、いつもと変わらない光景。それに、安心し、椅子を引く。

「はよー！ 沙羅」と明冬が元気よく言う。

「おはよう。元気だね、明冬は」

「おうっ。もう少しで夏休みだからなっ…！ 何しようかなあ」
明冬が言っている通り、夏休みがやって来る。それも、あと一週間。だから、クラスの中、騒ぎあっているのだろう。

「夏休み、3人でどこか出かける？」

思いつきそんな事を言うのと、意外な声が上がった。

「ごめん、沙羅！ あたし、部活の合宿あるんだーあ！ 遊びに行きたいけど…行けないやつ！」手を合わせ申し訳なさそうに言う蒼湊、そして、明冬。

「俺も悪い…ちよっと、婆ちゃん家行くんで忙しいし、従兄弟とか遊びに来るし…補習も…。本当にごめんっ！ 埋め合わせはいつかするっ…！」

「そっか…ごめん。あーあ、夏何しようかなー」

そう言った沙羅に二人はうっと唸る。

「いいよ、いいよ。そんな顔しなくたって…二人には予定が入ってるんでしょ？ 思いつきり遊んできなよ。ね？」気にしてない様子の沙羅に蒼湊は抱きつく。

「沙羅ああああ！ あんたはなんて、いい子なのっ！ いい子過ぎでしょ…！」

ギュウギュウと腕の力を強める蒼湊に、呻く沙羅。

「蒼漚…ちょ…っ…くるし…」

腕を叩くが反応無い。窒息寸前な沙羅に明冬が止めにかかる。

「おい…おまつ…ちょ、沙羅が死ぬってっ!! 蒼漚っ…」焦る明冬。凄い力で沙羅を締める蒼漚。それはまさに地獄絵図。

やっと離してもらい、沙羅はぜいぜいと息を吸う。

「はあっ…はあっ、ほんとに…しぬかとっ、思った…」

「ごめ…ん、沙羅。…いい夏の思い出になったでしょ？」

危うく、一生の終わりを迎える所だったと思う沙羅。

「どこがだよ! 夏休み始まる前に、死なせてどうするっ!」

「いいじゃんっ! 減るもんじゃないし…ねー沙羅っ」

無邪気に見つめてくる蒼漚に苦笑する。

まだ一日は始まったばかり。

「…:…カッコイイよねー! 久遠クン」

「うん。今、フリーなんでしょ? あたし、狙っちゃおっかなーっ」

「えー…? 無理じゃない?」

休み時間のトイレで数人の女子が言い合う。

「いつも、こればっかだよね…」蒼漚が声を潜ませ告げる。

「…うん。カッコいいもんね、樹は」ぽろっと漏らした言葉に蒼漚は叫ぶ。

「そりゃあね…って沙羅!」

「えっ?」

「今、久遠くんのこ、こと…よ、呼び捨てに…」

大声で言われ、沙羅は蒼漚の口を塞ぐ。

「ちよっ…声大きいっ!」

トイレに沙羅の声が響き、話していた女子が沙羅を見る。その事に気付き、暴れる蒼漚を引っ張り、トイレを出た。

「ちよっと、どういう事なの? 沙羅!」

やはり、そうなるか。と悪態を吐きながら、呼び捨てで呼んで言いと言われた事、告白された事を答えた。

「はあああああっ!?! 告白!?! あのだ遠くんからっ!?!」

ど、ど、どういう事? それ…」

「だからっ、声大きいって!」

慌て、またもや蒼湮の口を塞ぐ。

「もごっ…、ふぐっ!」

辺りを見、誰もいないのを確認し手を放す。

「ぷはっ…! 苦しかった…」

「ご、ごめん。大丈夫?」

「大丈夫! それより——沙羅はどうなの?」

ズイっと顔を近づけられ、沙羅は冷や汗をかく。

「え…っと、その…あの、…好きだよ樹の事」その言葉を聞いて安心する蒼湮。そして、優しく沙羅を抱きしめた。それは朝の時は違ったもの。苦しくは無く、暖かった。

「よかったね、沙羅。好きな人が出来て…あたし、本当は不安だったんだ。最近、落ち込んで悩んでいたみたいだったし。何かあったのかなって思ってたの。それに、久遠くんの事じゃなくなっって、沙羅が悩んでるのもっと別の事でしょ?」

「うん…」

そこまで言われるなんて思ってもいなかった。なんでもお見通しなんだなと沙羅は思う。

「それって、あたしには、話せないこと?」

「うん。ごめんね、蒼湮…。いつか、話すから」

「うん、それまで気長に待ってる」そんな蒼湮の言葉に泣きそうになった。

「ありがとう、蒼湮」

今は話せないけどいつか話そうと沙羅は心に決めた。

どこからか蝶が来て、校内を飛びまわっていた。

「あ、黒い蝶」

「えっ? どこ…」

「ほら、そこっ…」

蝶を指し、友達に告げる。

真っ青な空に不似合いな黒い蝶。黒い燐粉^{りんぷん}を撒き散らしながら、ふわふわと羽を動かす。疲れることをしらない昆虫。

「何しに来た、栢夜^{かや}」

蝶を見つけ、樹は捕まえようと手を伸ばす。伸びてきた手をひらりとかわし、栢夜と呼ばれた蝶は飛び続ける。忌々しげにそれを見つめ、樹は自分の婚約者の顔を思い出す。婚約を破棄したというのに、栢夜は追ってくる。それが嫌で堪らない。樹の心を掴んで離さないのは一人の少女。脳裏に彼女を思い浮かべる。

「…沙羅」

切なげに沙羅の名前を呼び、天真^{てんま}の所へと向かった。

ひらりと一匹の黒い蝶が、白く細長い女の指にとまった。蝶は羽を羽ばたかせ、その女の周りを舞う。蝶が女に何かを語りかけているようだ。燐粉を散らせながら、また女の手にとまる。

「そう…。女の名前は沙羅というの…樹を唆^そしたのは、…ふふっ、退屈しのぎにはなりそうね。でも、樹一つ間違ってるわ。この子はあたしじゃない。それも分からないなんて…」手にとまっている蝶をもう片手の方で、ぱちりと叩き、蝶を持ち上げる。そして、それを握り潰す。逃げる暇も無く、蝶は栢夜によって粉々になる。

「ねえ、色羽^{いろは}はどんな殺し方が好いと思う？」粉々になり灰と化した蝶の欠片を息で吹き、寝そべっているベッドに散らす。

「栢夜様のお好きに…」

「ふふっ。いつも、同じ言葉…。まあ、そこがいいんだけど」

色羽と呼ばれた男は栢夜を見る。そして灰になった、元吸血鬼^{もとヴァンパイア}の、蝶の欠片を手に乗せ呟く。

「私達は、夢いですね。栢夜様…」

「あら、どおして？ あたし達、吸血鬼^{ヴァンパイア}は綺麗で不老不死なのよ？ 死ねない身体なのに、どうしてそんな事を言うの？」

心外だというように栢夜は首を傾げ、ころころとベッドを転がる。

「死んだら、灰になるんですよ？ 人間は、形が残るのに：可笑しいでしょう。草花も木も、虫も動物も水だって残るんです。それなのに：私達は」

「簡単じゃない：それは、あたし達が特別だからよ。神に叛き、罰を与えられた者だから。だから、人の形をして、人間の血を吸うの。素敵じゃない：」

くすくすと笑う栢夜はベッドから降り、色羽に近づく。

「――吸血鬼ヴァンパイアに生まれてしまった事を悔いているの？」

「いいえ。そんな事を考えただけです」

「くすっ：色羽らしい」

色羽の頬に触れ、首筋を撫でる。

「っ：栢夜様？」

「血を、頂戴：？ 色羽の血が欲しい：の」

細い腕を色羽の首に巻きつけ、紅く瞳を光らせる。それは血を求めている証拠。血を飲むときだけ、栢夜の瞳は自分に向けられる。この時間が酷くも、待ち遠しい。細い栢夜の体を抱きしめ、彼女のウエーブがかった銀色の髪に指を絡ませる。

ブツリと音を立て栢夜の小さい牙が首に埋まる。血を啜る音が、部屋に響く。

「：っう：」

声を漏らせば、首筋から顔を上げ、栢夜が見上げてくる。そんな栢夜が愛しく思う。口元には血が付いていて、それを親指で拭き、指に付いたそれを舐め取る。栢夜を覗き込み見れば、その眼は虚ろ。次第に意識がはっきりしてきたのか、栢夜は”色羽”と囁くように呼んだ。

「はい：？ 为什么呢、栢夜様」

「囁んで。あたしを：」

「な、なにを：」言われた言葉に驚く。今まで血を吸われた事はあった。栢夜の血を吸うという事はなかった。それに、血を吸えな

どと言われたのは今回が初めてだ。栢夜に何があったと言うのか、それだとすると、色羽じゃなく別の誰かを想って言っているのだ。

「飲みたいでしょ？ 血を吸ってばっかじゃ、あたしだって嫌だもの…だから、色羽」

請うように言われ、色羽は迷う。血を吸いたいけれど。しかし己は誰かの、否、相手はもう誰か分かっている。久遠樹の代わりなのだ。自分は。色羽はもし自分が婚約者なら、栢夜にこんな悲しい思いはさせないと思っていた。けれど、それはあくまで色羽の想い。

「ですが…栢夜様、貴女には」

黙ったまま、栢夜は首筋に爪を突き立てる。そこから、真っ赤な血が溢れ、甘い匂いが色羽の鼻を掠める。好きな女性のものなら尚更、啜りたくなる。その匂いに誘われ、色羽は栢夜を抱き寄せる。

「…っはあ、はあ」

荒く息を吐き、欲望と戦う。駄目だ、血を吸っては。取り返しの付かない事になる。そう言い聞かせるが収まってくれない。

「良いのよ？ 飲んで…」

その時、カチリツと音を立て色羽の何かが崩れた。そして、栢夜の血を貪る様にその首に顔を埋める。甘い栢夜の血が喉を潤していく。もっと欲しいと吸血鬼の自分が叫ぶ。

「…あっ、…いつき…」最後の一滴をゆっくりと飲み込み、栢夜の顔を見つめる。

切なくも甘い栢夜の声。けっして自分はそんな声音では呼ばれない。久遠樹だからこそ、追い求める栢夜。やはり、彼女は樹を求めているのだ。自分では無く、吸血鬼界の王、久遠樹に。なんとも苦しい現実だろうか。

血を吸いすぎて気を失った栢夜を見て嘆くように呟く。

「貴女は、とても美しく残酷ですね…。私にこんな思いをさせ、夢を見ている」

儚さとは美しさ、酷さ苦しさという意味を含め栢夜に言ったのだった。

「私が儂いと思ったのは命ではありません。貴女の事を言ったのです…」

ゆるりと瞼、頬、額を撫で、抱き寄せる。

「何故、樹様のですか…。私では駄目のですか？」

小さな呟きは風によって消え去り、カーテンが色羽を嘲笑うように揺れていた。

第28章

暑さで寝付けず、目を覚ます。外はまだ暗い。壁に掛かっている時計を見ると、まだ起きるには早すぎる時間。ゴロリと寝が入りをうち、今日の事、正確には昨日の事だけど。その事を思い出す。無意識に沙羅は唇を、なぞる。想像より熱かった樹の唇、吐息、温もり。彼の全てが沙羅を熱く溶かしてゆく。樹の事を思い出し、余計に目が覚めてしまう。

「：樹は、私の事、”好き”なんだよね：なんか、嘘みたい」
ほうとため息を漏らし、ばふっと側にあった枕に顔を埋める。

異性から告白されたことは何度もあっても、好きな異性からなんて一度もなかった。嬉しいけど、自分で良いのかと思う。他に可愛い子だっているし、自分なんかと沙羅は思う。樹の事は好き。だけど、どうすれば良いか分からない。好きとは伝えたいけど、その後はどうすれば良い？ 両思いになったら付き合うの？ 樹と友達以上になること、その不安が抵抗となり沙羅の思いを繋ぎとめている。しかし、溢れる思いは止められない。彼を思い浮かべるだけで好きという気持ちが流れ出す。どうしようも出来ない思いに溺れてしまいうさだ。沙羅を溺れさせて苦しませ居ているのは樹であり、それは変えられない。恋や異性を好きになるからこそ、甘くほろ苦い思いをするのだ。それは誰でも経験するもの。

「……はあ」

息を吐き、目を瞑る。浮かんでくるのは樹の顔。彼のことを考えれば、会いたいと心が告げる。

「樹……」

と呟き、それが眠りの中に誘う言葉であるかのように、沙羅は寝息を立て眠っていた。

朝日が差し込み、小鳥が鳴く。まぶしさと鳴き声で沙羅は目を覚

ました。ふわぁーと欠伸を一つして伸びをする。

——今日は樹に伝える日。それを実感し、制服に着替える。リボンを調え、いつもより丁寧な髪にくしを入れ、歯を磨く。しゃこしやこと歯磨きを動かし、うがいをする。と、その時。奥の台所でトースターがチンツと快音を出し、音とご飯の匂いに誘われ、沙羅は洗面所を出る。

「あら、おはよう沙羅。今日は早いね…何かいい事があるのかしら」相変わらず鋭い勘の母。

ニヤリと笑みを返し、お皿にのっている食パンを一口かじる。サラダもあるし、目玉焼きにベーコンもある。ヘルシーな朝食だ。それを食べ終わり、鞆を持つ。

「いってらしゃい、気をつけてね。って言っても、樹くんがいるから大丈夫ね…」

「…な、なんでそこで樹が…」

「はいはいっ！ 分かってるから、外で待ってるわよ？ 彼」
急いで靴を履き、ドアに手を伸ばす。

「いってきますっ」

ガチャとドアを開ければ、樹が目の前に居た。驚き慌ててドアを引けば、すかさず足をドアに挟んでくる樹。

「…沙羅、何で締める？」

「えっと…そ、の」そう問い掛けられただけでも、沙羅の心臓は爆発寸前。

行き成り樹がドアを引き、前のめりに倒れ樹のシャツを掴んだ沙羅。そんな沙羅を抱きとめ、支える。

「大丈夫…？」

顔を上げると近い顔。ドクツと心臓が音を立て、顔に血が昇っている。直ぐにシャツから手を離し、髪を触る。

「…少しは意識してくれた？」と耳元で言われ、真っ赤になる。

「いつも、してた…」

小さな虫の鳴くような声音で告げる。

「……えっ？」

「っ…意識してたのっ…いつも、樹だけを見てた」

恥ずかしそうに俯いて言う彼女の言葉にきよんとする。そして、沙羅はもっと真っ赤になって言った。

「好きなのっ！ ……樹の事がっ」

顔を隠し逃げようとする沙羅を掴まえ、腕に閉じ込める。

「やっ…！ 離しっ…て！」

本当に嫌がるなら、叩いてでも殴ってでも逃げるだろう。でも、それを沙羅はしない。その事が嬉しくて強く抱きしめる。

「…好きだ沙羅」耳元で何度も囁く樹。抱き締められ、首筋に顔を埋められる。

心臓が保てなくなり沙羅は隙を見て腕から逃げ出す。

「…学校遅れるっ！」

恥ずかしいのか樹の鞆を引きずるようにして、歩き出す。そんな沙羅にくすりと微笑み、彼女の歩幅に合わせ隣に並んだ。

「…なあ、沙羅」

「な、なに？」まだ、頬を紅くし樹を見ようとしないう沙羅。慣れるまでは当分、沙羅のりんごのような顔を拝む事になるだろうと樹は思った。

「…何でも無い」

くくと喉で笑い、沙羅の反応を楽しむ。それにむっとし、頬を膨らませる沙羅。

このまま沙羅を見ていようと思ったのだが、どうやら時間切れのようだ。もう直ぐ、学校の入り口が見えてくる。残念と思いながら、樹はにやける。これからはいつでも沙羅に会える。彼女はもう自分のもの。人間を好きになるなんて思っても居なかったが、と沙羅を見つめた。

パックのジュースを飲みながら、くたつと蒼渾にもたれ掛かる。
「どうしたの、沙羅。なんか、疲れているみたいだけど…」

「どうしたも、こうしたも：私の心臓が持たないっ!!」
愚痴れば、それは惚気だと言われてしまう。

「：へえ。早いわねー。事が進むの」

「ヴ：だって、言わなきゃいけないのかなーと思って：」

「あんた、馬鹿でしょ」

「だって：どう言っていいいか分からなかったんだもんっ!」
顔を真っ赤にして沙羅は言う。

「でも、嬉しいんでしょ? カレカノになって」

「そ、それを言わないでっ：」

「おーお。真っ赤になっちゃって可愛らしい。：ねえ! 明冬もそう思わない?」と言葉を投げかける。

「：よかったな、沙羅」

咎められているような気がする。それに、明冬の顔が怖い。何かあったんだろうか。

「で? なんで、沙羅は此処にいるの?」

「お昼食べに：?」

「はあ!? 普通、行くでしょっ! 久遠くんのところに!」

「な、なんで?」訳が分からない。どうして、此処にいちや悪いのか。

「鈍感。だって、付き合ってるんでしょ? お昼一緒に食べるのが

基本よ、基本っ」

基本なのかと納得する。

「さ、立って!! 今からでも、遅くないからっ! いってら」

立たされて、教室から出される。

「ちよっ：!」

叩いても、返事は返ってこない。窓から、お弁当が投げられる。慌ててそれをキャッチし、ため息を吐く。危なかった。お弁当の中身が潰れていたらどうしよう。

しぶしぶ、沙羅は立ち上がり、樹のクラスへと向かう。

「あの：。久遠樹くんっていますか?」

廊下側に居た、眼鏡を掛けた男に沙羅は話し掛ける。

「樹？ 樹なら、さっき出て行ったよ。君は…」

樹と呼んでいる事は、彼と仲がいいのだろう。

「お…、アイツが話していた子じゃん。へえ、面白いな、樹」

顔をズイッと近づけられ、退く。近づけられた彼の瞳を見て吸血鬼だと分かった。人間離れした風貌。結っている雰囲気のごとくなく樹に似ている。

「天真、樹に知れたらどうする…。厄介ごとはごめんだ」

ずれた眼鏡を直し、ため息を吐く。

「いいじゃん。だって、樹のお気に入りなんて初めてだぞ？ お前は気にならないのか、神楽？」

「気にならないと言えば嘘になるな…」

「だろ？ なあ、樹が戻るまで俺達と話しようぜ、沙羅ちゃん」

突然呼ばれた名前に驚き、目を見開く。

「私を知ってるの…？」

「だって、なあ？」

「ああ…知ってるさ。君の事は。樹がいつも五月蠅く、沙羅沙羅って呟いてたからね」

その事を聞き、顔が熱くなる。

「あ、樹から、俺達の事聞いてねのか？」

コクと頷けば、天真と神楽は顔を見合わせる。

「これは…独占欲か？ 樹の」

「そうじゃねーか？ たくっ…少しは言えっつの」

樹の事で会話をするなんて。なんか、吸血鬼らしくない。もっと違う形を想像していたのに。予想と違い、笑いが零れる。

「くすくすっ……」

沙羅から漏れた、笑いに二人は何かと思い彼女を見る。くすくすと微笑を浮かべる沙羅が居て、顔を見合わせる。

「あ、ごめんなさい…。余りにも予想と違って、笑っちゃった。ごめんね？」

二人を交互に見て綺麗に微笑む沙羅。そんな彼女に毒気を抜かれ、天真と神楽は見惚れた。

「じゃあ、取り合えず。自己紹介とちゅーことで、俺は武藤^{むとうてんま}天真。よろしく」

握手を交わし今度は神楽と呼ばれている人を見る。

「泉^{いすみかぐら}神楽。まあ、よろしく」なんだか対照的な二人だなあ。そう思い、くすりと笑う。そして、失礼だと気付き、止める。

「私は…」

「いい、知ってる。水無月沙羅だろう？」
見透かしたように言う神楽。

「で、沙羅チャンはさ、どこまで知ってるの？ 樹はほとんど知ってるって言ってたけど、実際は？」

^{ヴァンパイア}吸血鬼の事だ。

「全部知ってます。樹が私達と違う事も、高宮架斐の事も…」

「驚いた…そこまで、知ってるなんて」

口をあんぐりと開け呆けている天真。

「じゃあ、樹に婚約者がいる事は？」

「…えっ？」

信じたくない。樹はそんな事一度も言っていなかった。

「ま、婚約者っていても、樹は破棄したみたいだからな…誤解を招く様な事、言うなよ神楽」

「事実だろう？ 破棄しても、あの女は樹を付きまとっている。気持ち悪くて仕方が無い…俺なら、すぐ付き返すのに」

その言葉を聞いて少し安心した。

「そう言えばさ、沙羅チャンは樹とどういう関係な訳？ それが一番聞きたかったんだけど…」

「天真、付き合ってるに決まってるだろう」

恥ずかしくて言えなかった沙羅は神楽に助けてもらった。

「そうだろう？」

「…はい、そう、です」恥ずかしがりながらも沙羅は言う。

「なるどねえ、道理で樹が惚^{のろけ}気てたわけだ」

「アレだけ、分かり易いところちも困る」

「…えっと、樹はいつ戻ってくるんですか？　まだ来ないけど…」

「ああ、それは…栢夜と話し込んで、うっ」

神楽が肘で天真をどつく。

「考えなしに口を出すな、馬鹿天。彼女が困るだろう…今、樹が話しているのは栢夜じゃないはずだ」

「栢夜？」不安な顔をして二人を見比べる。

「ほら見ろ」

じろりと神楽に睨まれ、冷や汗をかく天真。

「屋上だ。行きたいのなら行けばいい…」

「ありがとうっ」最後に微笑み、駆け出してゆく沙羅を見て、お腹を押さえながら天真は眼鏡を拭く彼に問う。

「惚れたのか？」

「変な事行つてると、塞ぐぞ」

「ご、めんって…。けど、樹が惚れた訳分かった気がしたなあ…」

「同感だ」

「ああ…先に見つければよかったな」

沙羅の顔を思い浮かべ、頭をかく天真。

「上手く行くといいな」

「そうだな」

そんな会話を交わし、二人は同時に屋上を見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2183j/>

Dark rose～永遠の時間～

2011年7月13日23時11分発行